

加茂市文化財調査報告（2）

七谷忠魂碑遺跡 緊急発掘調査報告書

1986

新潟県加茂市教育委員会

調査を終えて…

縄文時代の中期
から後期と推定さ

れる遺跡が当市黒水地内で発掘されました。先人の暮らしの一コマが3,000～4,000年ぶりに、ふり注ぐ太陽を浴びたことに大きな感動を覚えております。

昭和60年の市政10大ニュースの中で、「七谷忠魂碑遺跡発掘」が第4位であったことはそれだけ市民の関心事であったことを如実に物語っているようです。埋蔵文化財は「大地に刻まれた歴史」とも言われているように、ふるさとの歴史や文化を正しく理解するために欠くことのできないものであり、私たちの祖先が太古の自然環境の中でどのような生活をしていたかを探る上で、学術的にも貴重な判断材料を数多く提供したことになります。

埋蔵文化財の本格的な発掘調査は当市では初めての試みであり、当初は全く暗中模索の状況でありましたが、県ご当局の懇切なるご指導・ご配慮とともに、調査にあたられた日本考古学协会会员・川上貞雄先生らのご尽力によって、すべて計画どおり事業を終了することができました。

発掘調査期間中、小・中学校の諸君をはじめ多くの市民が現地を訪問ましたが、古代の歴史を目のあたりにされた皆様方の心の中には、文化財を愛護し、かつ、尊重する気運が育まれたことあります。

また、この貴重な経験は現在進行中である東部地区遺跡詳細分布調査の結果、発掘作業が行われる場合の参考となるものであり、まさに一石二鳥の効果を見出すことができました。

多大の成果をおさめて本調査が終わり、報告書を発行するにあたってご協力いただきました関係者各位に心から感謝申し上げ、ごあいさつといたします。

昭和61年3月

加茂市教育委員会教育長 小林知二

例　　言

1. 本書は、新潟県加茂市内七谷地区における国道290号線の改良工事によって、その一部分が破壊されることとなった縄文遺跡の緊急発掘調査の記録である。
2. 本事業は、新潟県土木部より依頼を受けて、加茂市教育委員会が実施した。
3. 当調査に先がけ、昭和59年12月17・18日に試掘調査を行い、60年1月に報告した。当調査は、昭和60年6月10日より7月29日の現地調査及び秋、冬期間にわたる、図面、遺物の整理作業を以って終了した。
4. 出土品はKR○○○と注記し、加茂市教育委員会（加茂市民俗資料館）が保管する。
5. 掃図の内Fig 1 遺跡と周辺の遺跡分布図は既存の周知の遺跡に、整理作業後の60年12月にまとめられた加茂市七谷地区での遺跡分布調査の結果を追加した。
6. 同Fig 2 遺跡周辺実測図は、新潟県土木部の実測図を基にして調査員が追加測量を行ったものである。
7. Fig 4 を始めとする掃図中の数字で表わした土質は次の通りである。
 1. 黒色土層、2. 茶褐色混土層、3. 地山、4. 砂利層、5. 炭混入黑色土層、6. 炭混入混土層、7. 盛土、8. 木炭混入土、9. 表土
8. 本書の執筆はI-1は小柳陽一、I-4は杉本、その他は川上が分担した。
9. 発掘調査関係者は次の通りである。

調査主体者 小林知二（加茂市教育委員会教育長）

調査担当者 川上貞雄（日本考古学协会会员）

調査員 古川信三（加茂市文化財調査審議会委員）

長谷川昭一（　　タ　　）

木村宗文（前文化財保護指導員）

松井寛（　　タ　　）

調査補助員 杉本恵子

佐藤友子

佐藤正子

高松茂子

作業員 加茂市高齢者事業団

調査協力者 新潟県教育庁文化行政課、加茂市民俗資料館、荒木繁雄、新潟県土木部道路建設課、新潟県三条土木事務所、番場良作、株式会社堀内組
事務局 加茂市教育委員会社会教育課…小柳陽一（課長）・中沢皓（係長、専従）・木津リエ（主査）・青柳芳樹（主事）・斎藤淳（主事、専従）

目 次

I	序 章	
1	調査に至る経緯.....	1
2	遺跡の立地と現況.....	3
3	発掘調査地点と層序.....	5
4	発掘調査の経過.....	6
II	遺 構	
1	集石遺構A類.....	9
2	集石遺構B類.....	9
3	集石遺構C類.....	9
4	集石遺構D類.....	22
5	配石遺構A類.....	22
6	配石遺構B類.....	23
7	配石遺構C類.....	23
8	立石遺構.....	24
9	土 塚.....	24
III	遺 物	
1	土 器 中期の土器、後期の土器.....	25
2	石 器 刺片石器、礫石器、自然石.....	29
IV	ま と め.....	38
V	図 版.....	41~57

挿 図 目 次

Fig 1	遺跡と周辺の遺跡分布図.....	2	Fig 9	3号集石遺構.....	14
Fig 2	遺跡周辺実測図.....	4	Fig10	4号集石遺構.....	14
Fig 3	グリット図.....	5	Fig11	5号集石遺構.....	15
Fig 4	発掘区域地層図.....	6	Fig12	6号集石遺構.....	15
Fig 5	遺構全測図.....	10	Fig13	12号集石遺構.....	16
Fig 6	集石遺構群平面図.....	11	Fig14	13号集石遺構.....	16
Fig 7	1号集石遺構.....	12	Fig15	2号集石遺構.....	17
Fig 8	14号集石遺構.....	13	Fig16	2号下層平面図.....	18

Fig17	7号配石遺構	17	Fig29	土器Ⅰ 中期の土器(%)	25
Fig18	8号配石遺構	18	Fig30	土器Ⅱ 後期の土器(%)	26
Fig19	22号配石遺構	19	Fig31	土器Ⅲ (%)	27
Fig20	9号配石遺構	19	Fig32	石器出土位置図	28
Fig21	18号配石遺構	19	Fig33	石器Ⅰ 石鎚、石箆(%)	29
Fig22	16・20・19・10号配石遺構	20	Fig34	石器Ⅱ 搖 器(%)	30
Fig23	11号配石遺構	20	Fig35	石器Ⅲ 石斧、石鍤(%)	31
Fig24	15号配石遺構	21	Fig36	石器Ⅳ 磲 器(%)	32
Fig25	17号立石遺構	21	Fig37	石器Ⅴ 磟 器(%)	33
Fig26	21号立石遺構	22	Fig38	石器Ⅵ くぼみ石(%)	34
Fig27	24号土 坂	22	Fig39	石器Ⅶ くぼみ石(%)	35
Fig28	23号土 坂	23	Fig40	石器Ⅷ スリ石、石皿(%)	36
〔表〕 面付石計測表					38

図 版 目 次

P L 1.	1. 遺跡近景 2. グリット設定	41
P L 2.	1. 2. 発掘作業スナップ	42
P L 3.	1. 西側セクション 2. 南側セクション	43
P L 4.	1. 東方全掘 2. 中央配石	44
P L 5.	1. 6号、7号、13号、14号集石遺構 2. 3号、4号、5号集石遺構	45
P L 6.	1. 2. 1号集石遺構 3. 7号集石遺構	46
P L 7.	1. 22号配石遺構 2. 18号配石遺構 3. 10号配石遺構	47
P L 8.	1. 8号配石遺構 2. 9号配石遺構	48
P L 9.	1. 2. 配石遺構(15号、11号) 3. 17号立石遺構	49
P L 10.	1. 21号立石遺構 2. 2号集石遺構 3. 同2層目石組	50
P L 11.	遺物出土状況 1. E-8区 2. E-7区	51
P L 12.	縄文中期後期の土器	52
P L 13.	1. 石 鎚 2. 3. 石 篪	53
P L 14.	1. 石 槍 2~12. 揉 器 13. 磨製石斧 14. 環状石器	54
P L 15.	穀 器	55
P L 16.	1. くぼみ石 2. スリ石 3. 石 鍤	56
P L 17.	1. 石 皿 2. 面取石	57

I 序 章

1 調査に至る経緯

市街地から加茂川に沿って6kmほど遡った所に黒水の集落が軒をつらねる。旧中蒲原郡七谷村の一区画である。栗ヶ岳を水源とする加茂川が薬師山にぶつかり、ほとんど直角に流れの向きを変えている。この辺りに樋脇橋があり、また、つい最近まで旧七谷村役場の建物もあった。明治39年に建立された七谷忠魂碑も加茂川左岸の小高い丘の上に見え、昔からこの地域の人たちの心のよりどころの地でもあったし、また、この辺り一帯は周知の遺跡（遺物包含地）であり土器片などがときおり発見され、古代歴史のロマンが漂っている場所でもあった。

このすぐそばを国道290号線が走っている。加茂市内では、南蒲・下田村から西山へ入り、下高柳、黒水、長谷、下土倉を経て、中蒲・村松町へ通する主要路線である。現在、長谷地区と黒水地区内に拡幅改良工事が進行中であるが、七谷忠魂碑付近では新しい法線がこの包含地の一部にかかるため、急拡工事を中断し、発掘作業が急がれることとなった。

このような本格的な遺跡発掘調査は加茂市では初めての事業であった。どのような手順で、どんな作業日程で取り組んだらよいのか、県文化行政課から細部にわたってご指導をいただいたことは言うまでもない。

発掘調査員として、川上貞雄（日本考古学协会会员 北蒲・笛神村）、木村宗文（前文化財保護指導員 中蒲・小須戸町）、松井 寛（同 三条市）諸氏からご承諾をいただくことができ、県文化行政課、三条土木事務所と入念な打合わせ協議を重ねながら、昭和60年度発掘調査の運びとなったものである。

準備段階では主として次のような経過をたどった。

59. 12. 4 県三条土木事務所工務第1課道路第1係から遺跡発掘調査について電話連絡
 - 11 樋脇橋橋台部分の試掘について県文化行政課と調査員に連絡、協議
 - 12 三条土木事務所と打合わせ
 - 17 バックホーで試掘開始 繩文後期土器片 集石群を検出 高齢者事業団から6人派遣 同作業に従事
 - 18 試掘継続 市議会総務文教委員会一行が視察
60. 1. 試掘調査報告書を作成
2. 14 埋蔵文化財包蔵地の発掘について、文化財保護法第98条の2により文化庁長官へ通知
2. 15 県文化行政課と詳細打ち合わせ
2. 18 文化庁長官あて文書の写しを三条土木事務所長へ送付
3. 4 埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、県教育長が県知事へ通知

このように、各方面から貴重なアドバイスをいただきながら発掘事業の態勢はひととおり整え

られた。発掘予定面積約1,000m²と比較的小規模ながら古里の古代史を探る夢のある仕事に寄せる期待感も、また、あったのである。

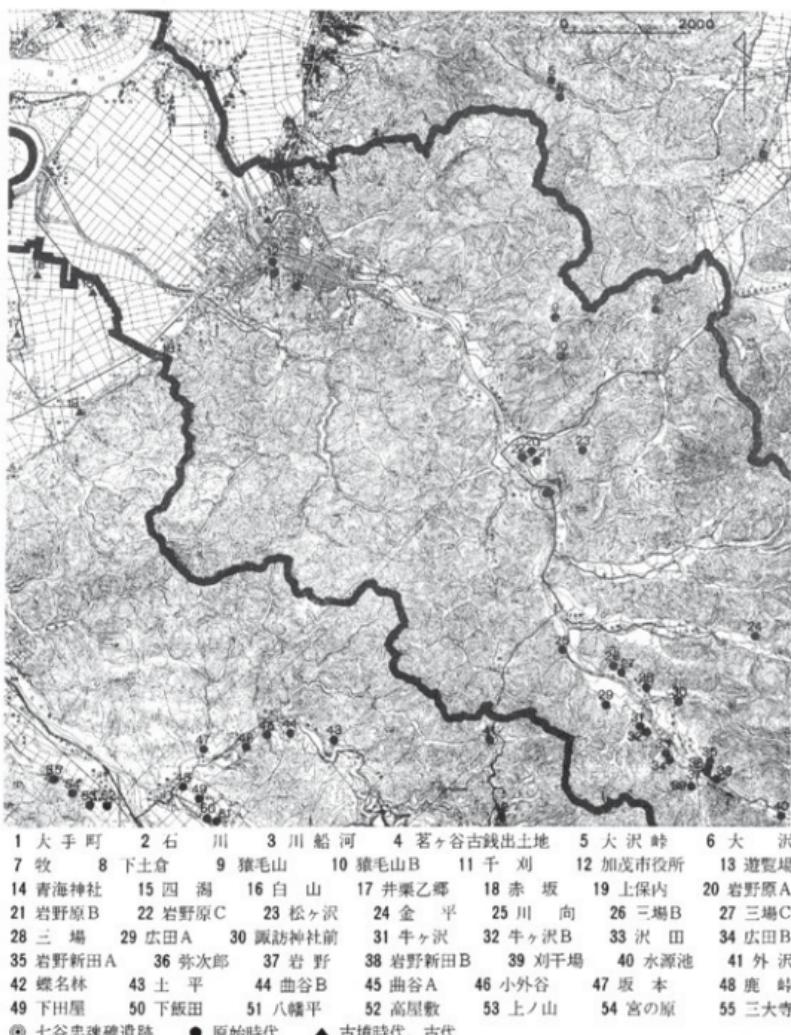


Fig 1 遺跡と周辺の遺跡分布図

2 遺跡の立地と現況

加茂市は越後のほぼ中央部、中蒲原郡と南蒲原郡の境に位置する。周辺は村松町、田上町、白根市、三条市、下山村に接する。県立自然公園の一つである栗ヶ岳(1,293m)に源を発する加茂川の急流添の山間地帯である七谷地区、下条地区と、上条地区(加茂地区)と、大平野を蛇行する信濃川添の須田地区に大別される自然環境を有す。その中心となる市街地は山腹に位置する青海神社の門前町として発達したかのように見える。

加茂の名は小京都と言われるごとく京都の賀茂神社、賀茂川に由来すると言われ、青海神社は「延喜式」神名帳にその名を見ることが出来、少なくとも9世紀末には集落の存在が考えられる。山麓続きの三条市保内地区には三王山古墳群があり、加茂市の成立との関連を考えるむきもある。又この頃青海神社の創立を伝える故事もある。それらはさておき近くには平安時代から古墳時代にかけての「石川遺跡」をはじめ、古墳時代後期の「千苅遺跡」(昭和48年発掘調査)等がある。

加茂市周辺における遺跡の内、古代以前の遺跡をFig 1に見る時、下山村の五十嵐川及びその支流である鹿熊川流域に多数の遺跡があり、加茂川流域にはその上流部即ち宮寄上地区に集中している。古代以降の遺跡も同様のことであるが、加茂川の中流部及びその支流、下条川流域においての空白地帯は、これまで分布調査の空白地帯に当る所以であろう。

これらの遺跡の立地を見る時、須恵器、土師器が出土する古代から古墳時代にわたる遺跡は平野部の低湿地帯にあり、わずか「石川」「上保内」が丘陵端部に位置する。原始時代の遺跡のほとんどが河岸段丘上に所在し、ごく少数が山中に位置する。これらの内、鹿熊川の最上流に所在する「外沢」が先土器時代の遺跡である以外は、すべて縄文時代の遺跡である。縄文時代の時期について判明しているものは中期、後期が主体となるが「下土倉」のみが前期の遺物を含むものである。なお縄文時代の遺跡の47%はその時期の把握を今後にゆだねられるところである。

七谷忠魂碑遺跡は、加茂川左岸の河岸段丘上に位置する。加茂川の流れが上流の盆地地帯を過ぎ、やがて中流に変化しようとする下黒水集落の上手、石高城山、住岡山(仮称)に挟まれ、さらに前方を薬師山に阻まれて大きな湾曲をよぎなくされた内側の段丘上にある。住岡山(仮称)の岩山の細く険しい尾根が北々東にのび、その末端は西向きの緩斜面を有する段丘となり、現状は畠地であり北東側の一部は公園となり、先端は断崖となって川へ落ち一端は国道によって截ち切られている。公園部分の標高は58mから59.5m、畠部分の最高部で62mである。この台地と崖下の国道とは4m、又、川面とは約10mの段差が見られる。

Fig 2、遺跡周辺実測図に見られる如く、斜線で被った部分が発掘調査予定地であり、これまで公園として使用された部分で、背後の点網で被った部分と合わせて遺跡の範囲と考えられる部分である。道路以北の張り出し部分は標高51~50mとさらに低地となって現在の集落となる。樋脇橋を渡った対岸即ち南側はわずかの平地があり岩山となる。この平地部分は旧七谷村役場の建物があった湿地である。

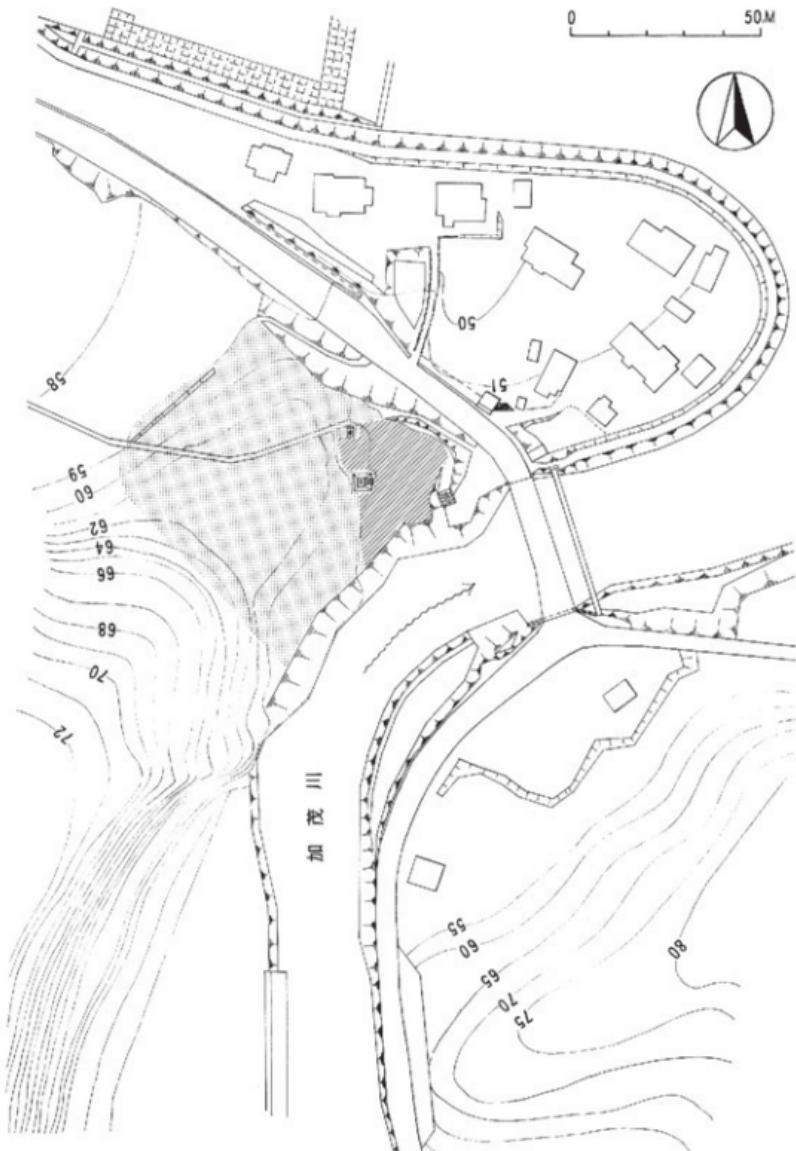


Fig 2 遺跡周辺実測図

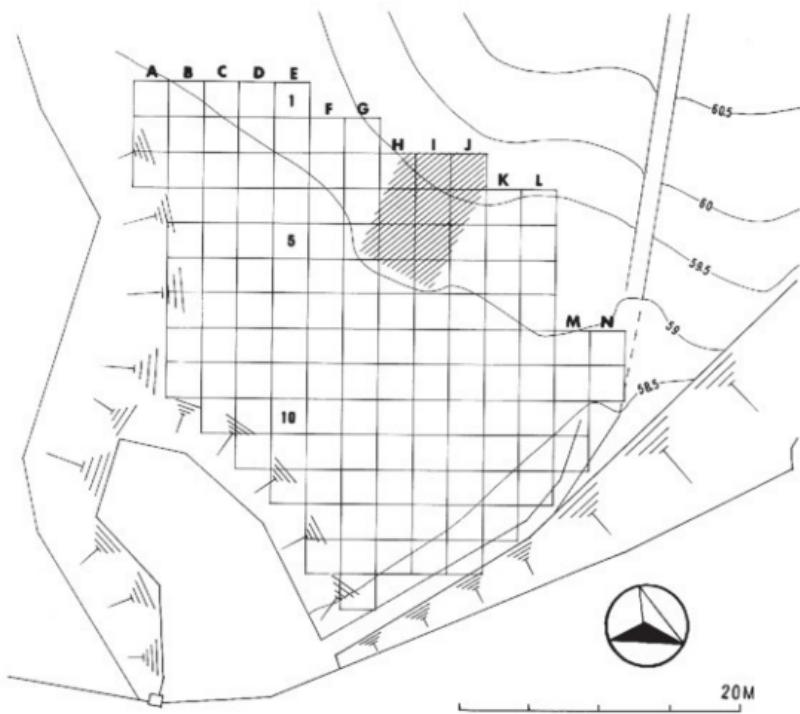


Fig. 3 グリット図（斜線未掘）

3 発掘調査地点と層序

発掘調査範囲は、道路改良工事によって破壊される部分と、忠魂碑の移転位置に限られたが、一部未買収地を除外した。実質的な発掘調査範囲はこれまで加茂市々有地であった公園地内に限られ、その内現存する忠魂碑部分（Fig. 3 の斜線の範囲）を除外することとなった。

発掘調査は重機による表土剥ぎ作業後、グリットの設定を行ったが、あらかじめグリット上に合わせた地層断面測定位置をキ印状に残して表土を削除した。グリットは1区 $2.5 \times 2.5\text{m}$ とし、台地の傾斜にそってほぼ西から東方へ1~15列、ほぼ南から北へA~Nの記号を符し、Fig. 3に見られる不定形な輪郭であるが都合133区画を設定した。なお前述した如くこの区画の内には未掘である忠魂碑部分とその背後地が加わっており、さらに南側及び南東側の急斜面に位置する部分は調査を除外した。

調査地点の土層序列は、基本的には樹根を多量に含んだ黒色土を第1層とし、第2層は密度の

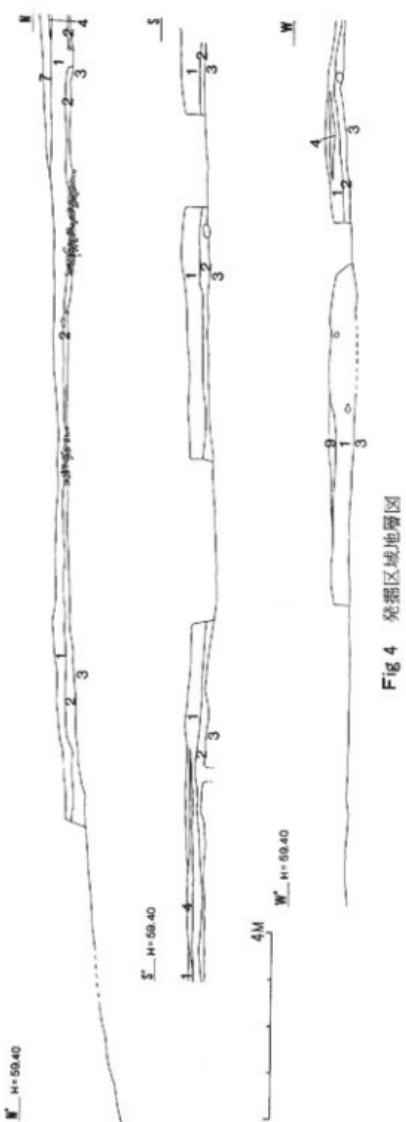


Fig. 4
発掘区域地層図

高い茶褐色混土層で、主にこの接点に遺構、遺物が包含する。遺跡の営み当時の地表面はこの第1層黒色土層の下部にあると考えられるが、現時点では把握しがたい。

この発掘地点における地層序列に関しては、かつて公園造成時点において緩斜面の削平に当り表土の排除が行われたものと考えられ、Fig 4 のWセクションに9で示した表土が残存する。なお同図のNセクションに見られる7は忠魂碑のための盛土の流出部分である。3の地山は1mから1.5mのローム層であり、下層は地質学上に著名な「七谷層」と呼ばれる頁岩である。

以上の調査範囲内には、多くの樹木があり樹根によって搅乱された部分、及び記念樹のため秋口になって移植を予定している為、未掘となった部分等がある。特にI-9区における搅乱区域は根廻り直径2.5mを越えた樅の大木であった。ついでながらG-11を中心とした搅乱区域は電柱及び支柱等によるものと考えられる。

4 発掘調査の経過

6月10日(月)くもりのち雨 七谷忠魂碑遺跡発掘準備作業開始。現場対岸の市有地に発掘作業員休憩用プレハブ1棟を設置する。

6月11日(火)くもり 川上、杉本、教育委員会にて諸事打合せの後現地に入る。午後現場隣接地主、市関係者立会いのもとで境界の確認を行う。事務所用プレハブ1棟を設置する。資材未搬入。

6月12日(水)小雨 現地周辺のコンター測量を行い、発掘地域の1部に杭打をする。

6月13日(木)くもり時々雨 堀内組の重機(バックホー)にて表土剥ぎ開始する。資材搬

入。トイレ設置。

6月14日(金)晴 グリットを組む。現場近辺センター測量継続する。ベルトコンベア、発電機等搬入する。

6月17日(土)晴 加茂市高齢者事業団より作業員入る。社会教育課長あいさつ。

事務局より作業時間等の説明等がある。スライド等を見ながら当遺跡の概要、作業内容の注意事項等の説明を行った。現場作業始める。ベルトコンベアを設置し試運転する。午後発掘作業開始。

6月18日(日)くもり 昨夜の雨のため現場のコンディション悪く発掘作業休み。加茂川を中心として地形観察の後、周辺測量(全測)を始める。

6月19日(月)くもり 発掘作業休み。周辺測量(全測)を継続する。

6月20日(火)晴 発掘作業。各グリットに作業員2~3人配置。遺物出土。午後平板に遺物位置点を落としながら収納する。巨大な木の切株が数ヶ所にあるため除去作業は難航する。

6月21日(水)くもり 切株除去。発掘作業昨日と同様。遺物出土。

6月22日(木)晴 切株除去難航。周辺測量(全測)継続。センター測量継続(川向い)。

6月25日(日)くもり 発掘作業、切株除去作業。遺跡現場背後の山へセンター出しに入る。(川上、外山)

6月26日(月)くもり後小雨 発掘作業。切株除去作業。県文化行政課職員視察。

6月27日(火)晴 発掘作業。切株除去作業。現場清掃、現場擾乱を防ぐため発掘地にバリケートを設ける。

6月28日(水)くもり 発掘作業。事務所にて現場拡大図S1/100作成、グリット縮少図作成、トレイス、遺物実測等作業をする。

6月29日(木)くもり 発掘作業。南北中央部アゼの断面測量完了。

6月30日(金)雨 発掘作業。

7月1日(土)晴 発掘作業。石配置平板測量。南側アゼ断面測量。

7月2日(日)晴 発掘作業。石配置平板測量。南側アゼ断面測量完了。

7月3日(火)晴時々くもり 発掘作業。西側アゼ断面測量。南セクション壁より石甕3点出土。C-4区等に大小の集石遺構検出。新潟日報社取材。三条教育委員会金子正典氏、加茂市文化財調査審議会委員閑正平氏視察、他一般見学者多数。

7月4日(水)くもり時々雨 発掘作業。ベルトコンベア一大移動する。集石遺構検出。

7月5日(木)雨後くもり 発掘作業休み。石配置平板入れ。各石組水平出し。現場写真撮影のためはしご設置。一部写真撮影。

7月6日(金)くもり 各石配置レベル入れ。石組清掃。写真撮影。石の選別撤去後、地山まで剥ぐ。

7月9日(火)晴 全面清掃。石組と全面写真撮影のためはしご移動設置。ピット堀り。ベルトコンベア返却準備。本日で作業員による発掘終了。

7月10日(水)晴 西側、南側、中央アゼ断面測量完了。南側配石レベル入れ完了。加茂市市政モ

ニターのメンバー見学。加茂市社会教育委員視察。

7月11日(木)くもり 集石遺構実測（1号遺構、3号遺構）

7月12日(金)晴 遺物（石器類）注記、整理。発掘用具片付け。ベルトコンベア、発電機類撤収。

7月13日(土)雨 遺物（石器類）注記、実測整理。トレース作業。遺構実測。

7月15日(月)くもり 集石遺構実測、集石遺構半解体、写真撮影、集石遺構断面測量。加茂市広報担当者取材。

7月16日(火)晴 集石遺構実測、断面測量。集石遺構の石収納。プレハブ1棟撤収。本日より現場作業員2名。

7月17日(水)晴後くもり 集石遺構実測、断面測量。写真撮影。集石遺構の石収納。業者による排土搬出始まる。

7月18日(木)晴 集石遺構実測、断面測量。（6号土、12号）

7月19日(金)晴 集石遺構断面測量、写真撮影。4号土、5号土、2号土、3号土、半分解体。本日より作業員4名、内2名は遺物水洗作業。

7月20日(土)晴 集石遺構平面、断面測量。6号土、7号土、14号土に係る遺形組み。

7月22日(月)くもり時々晴 各集石遺構平面、断面測量。写真撮影。

7月23日(火)晴 各集石遺構平面、断面測量。加茂市広報担当者取材。水洗終了。

7月24日(水)晴 各集石遺構平面、断面測量。本日より現場作業員2名。

7月25日(木)晴 各集石遺構平面、断面測量。写真撮影。加茂市広報担当者再取材。

7月26日(金)晴 全体最終作業。三条新聞社取材。仏式により先人の供養。

7月27日(土)晴 現地事務所内整理。引揚げ準備完了。

7月29日(月)晴 本日より室内整理作業のため民俗資料館へ移動。

6月15日(土)、6月24日(月)、7月8日(月)は雨のため全面作業休み。

II 遺構

発掘調査の結果、後述するところの集石、配石遺構の検出を見た。Fig 5は遺構群の全体図である。ここでは何等かの遺構と考えられたものをその発見順に1号から24号として調査を行った。その他無数の礫群が散在（配置？）するを見た（PL 4 参照）。これらは大小の河原石であるが、意を以って配置したものとは考えられず、一応Fig 5 図に残らず実測した。同図中では1号、2号等の一部は省略した。なお、C-3区、D-2区、E-5区に見られる土塙やビットは遺跡に関連するものとは考えられないものと判断した。Fig 6は6、7、13、14、24号の遺構群の集合、重複等を示したものであり後述の参照にされたい。

1 集石遺構A類

第1号遺構（Fig 7、PL 6-1～2）J-5、6に主体部が位置する。配石の下部に土塙を有するものである。土塙はその口径を長軸は、N70°Eで2m、短軸1.2m、深さ0.45mでその断面は浅い薬研状を呈する。なお北西側に浅いテラスが見られる（Fig 7一下）。土塙の上部には8個の人頭大の偏平な石を配し、その上部は無数の拳大の礫で被っている。8個の石は最大径37cmで同図一中に示した如く塙の中心部に無秩序に配置されている。石質は安山岩が主である。土塙内部は黒色土、混土層の他は検出されない。なお上部の礫中には石器（凹石、礫器）が混入している。

2 集石遺構B類

土塙の上部に小礫群をともなうもので、3号遺構、14号遺構がある。

14号遺構（Fig 8、PL 5-1 参照）はFig 6に示した如く、24号遺構に接し、6号、13号遺構と重複するもので、西側の一部が少々攪乱されている。遺構は浅い土塙とその上部に小礫の集石を見るものである。塙は直徑245～220cm、底径190cmの円形を呈し、深さは30cm程度である。礫は長径25cm程のものも見られるが、拳大のものが主である。礫群の下層は黒色土、小量の木炭混入の黒色土、及び同混土層とから成る。灰の検出、焼土、焼石等はまったく見ることは出来ない。

3号遺構（Fig 9、PL 5-2 参照）は、小礫群が土塙上部の脇に位置するものである。塙は長径175cm、短径11.5cmの卵形で深さは58cmで底部はせまい。塙の壁面は木根によってやや変形している。塙内より大型の石器の出土を見たのみである。

3 集石遺構C類

小礫の集石でその他の構造物が見られないものをまとめた。4号、5号、6号、12号、13号遺構がある。

4号遺構（Fig 10）は直径15cmを最大とする礫でその数約220個の集石でありその範囲は140×170cm程になる。この遺構の下部がこころなしか窪んでいるかに見えるが偶然のものと考えられる。

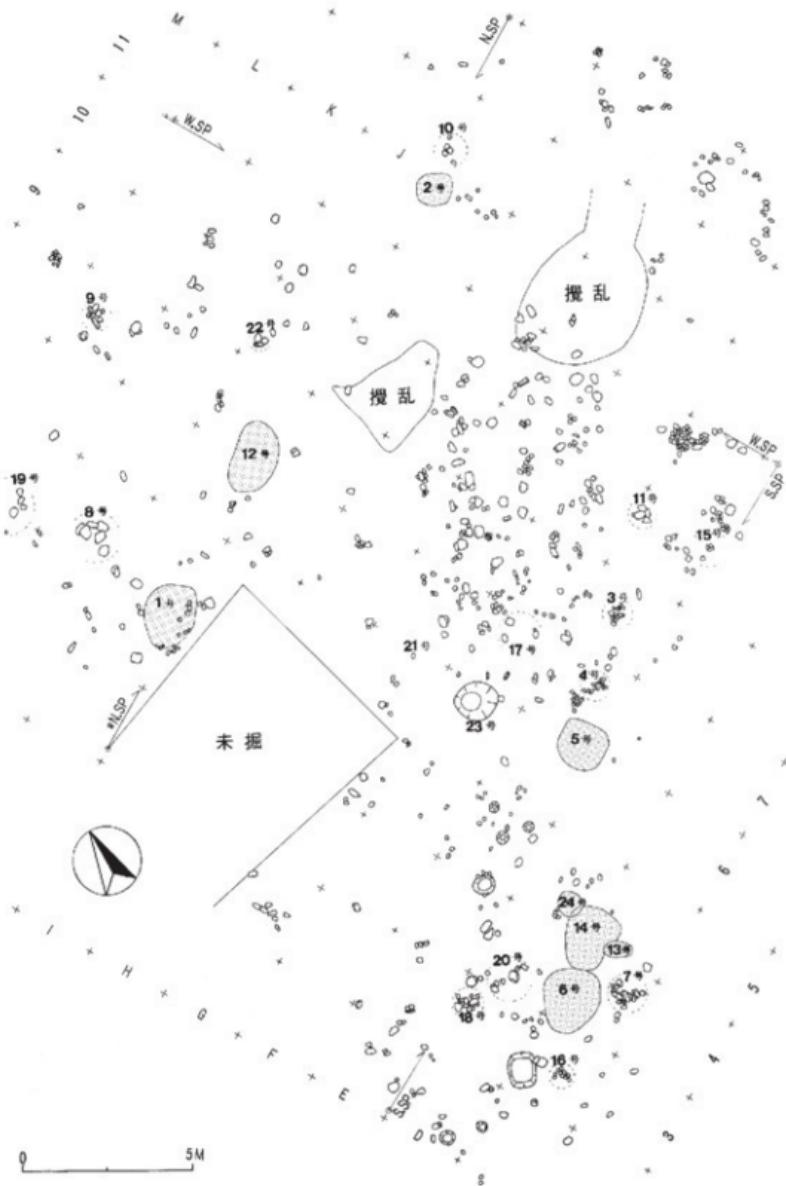


Fig 5 造構全測図

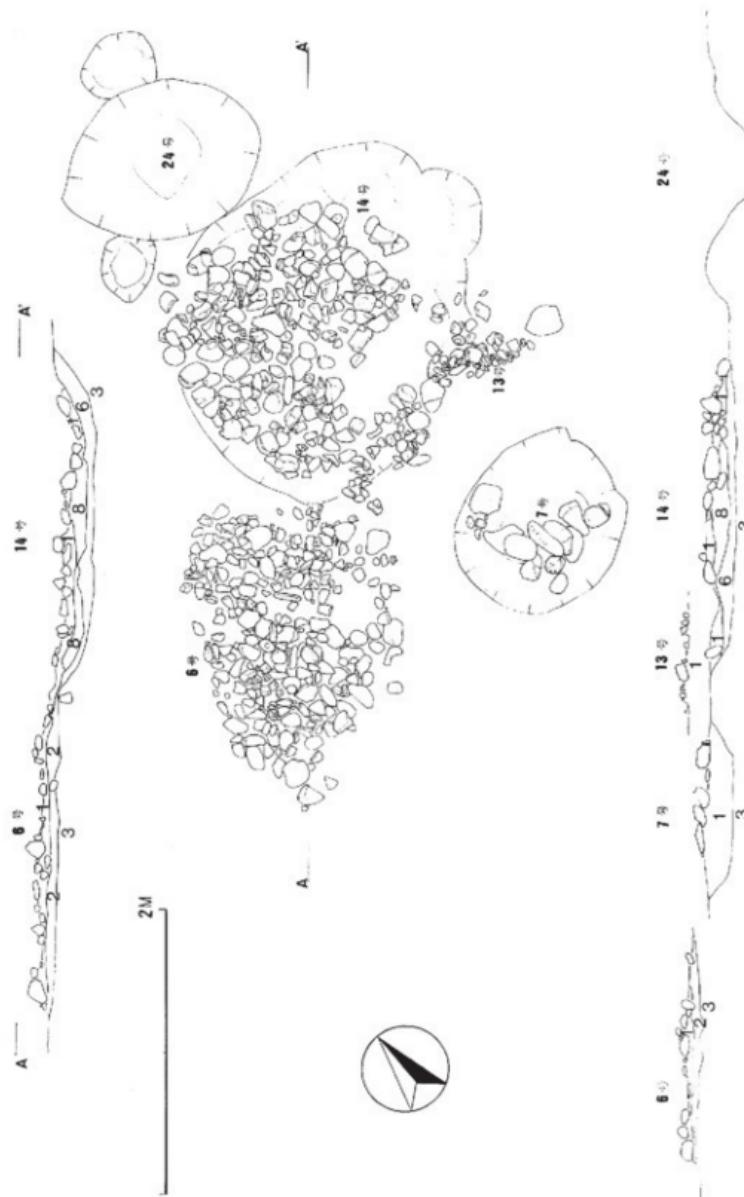


Fig. 6 集石层横断面图

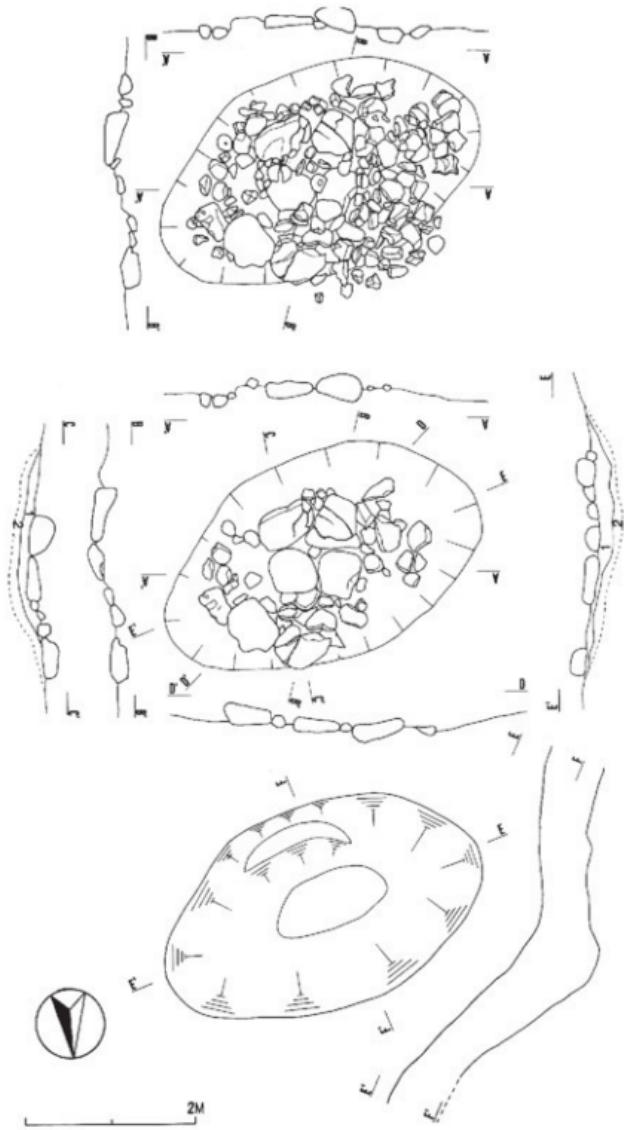


Fig 7 1号集石遗構

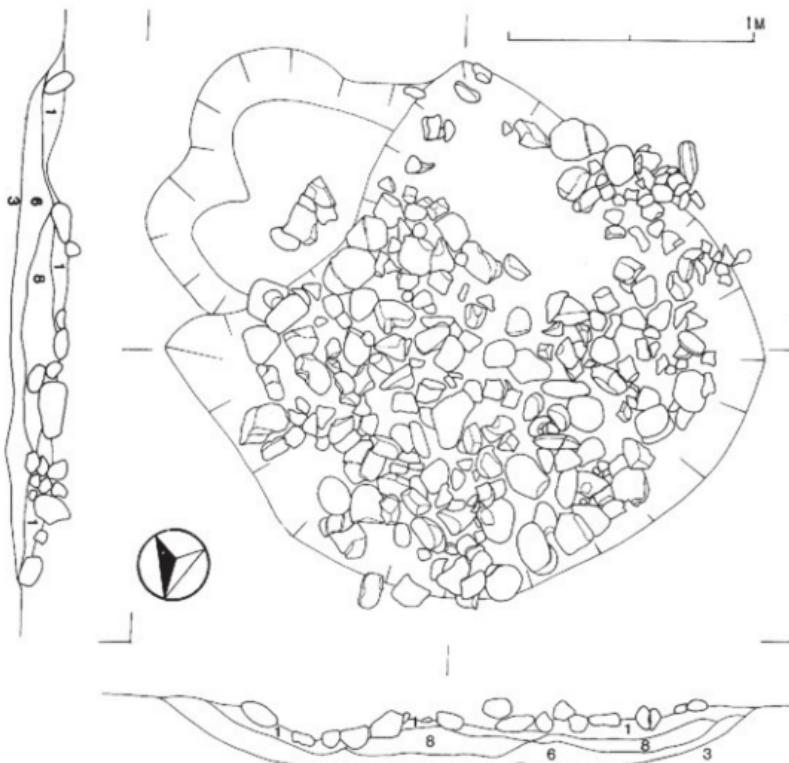


Fig 8 14号集石遺構

5号遺構 (Fig 11) は4号遺構に並列して所在する (PL 5-2 参照)。約120個の集石であるが、その50%が破碎された小礫である。なお長径15cmを超えるもの7個がある。

6号遺構は前述した如く14号遺構にその一部が重複する (PL 5-1 参照)。最大径が20cmを超える礫8個を含めその数約240個でその内13%が破碎礫であり、集石範囲は150×220cmである。

12号遺構 (Fig 13) はやや細かい礫群である。その数約240個を数え、集石の範囲は130×180cm程である。

13号遺構 (Fig 14) は14号遺構に一部重複する。破碎礫を主とし約45個の集石である。範囲は50×100cmと狭い。

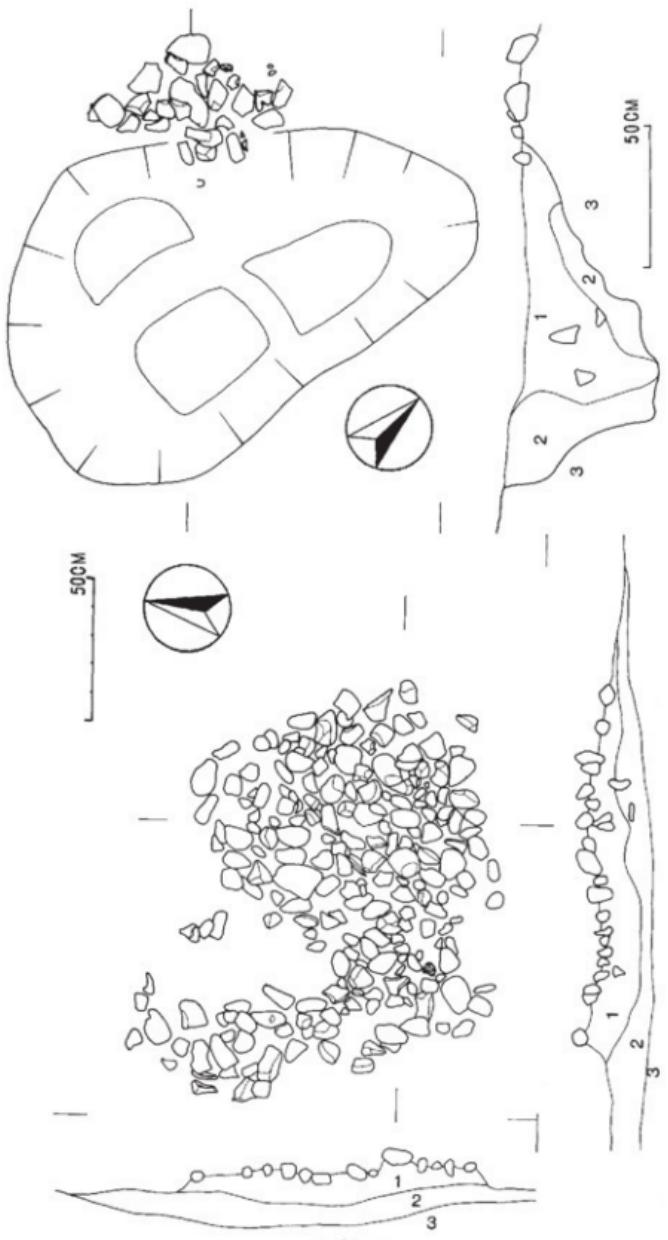


Fig 9 3号集石遺構

Fig 10 4号集石遺構

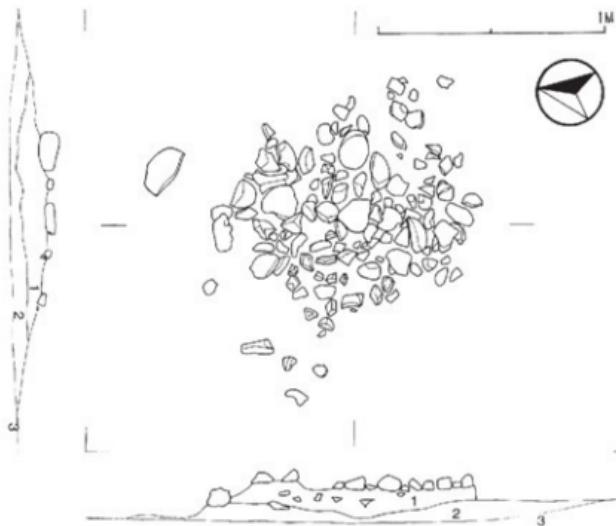


Fig 11 5号集石遺構

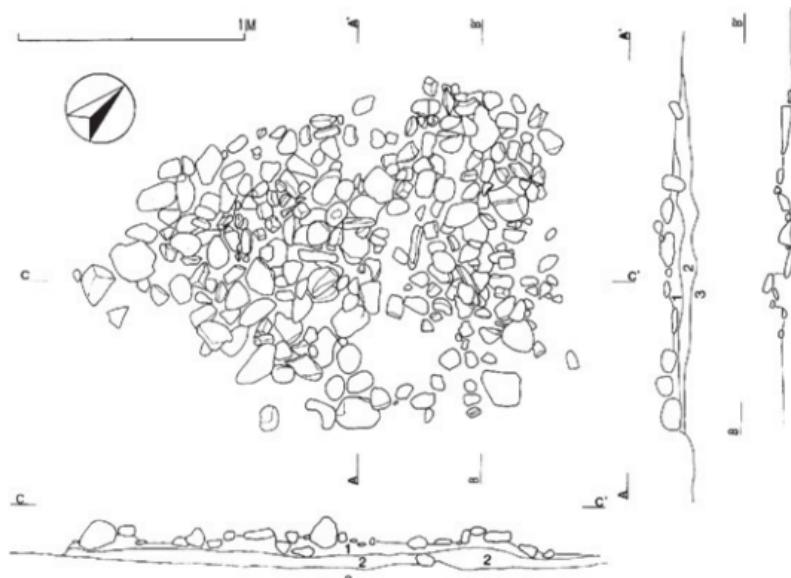


Fig 12 6号集石遺構

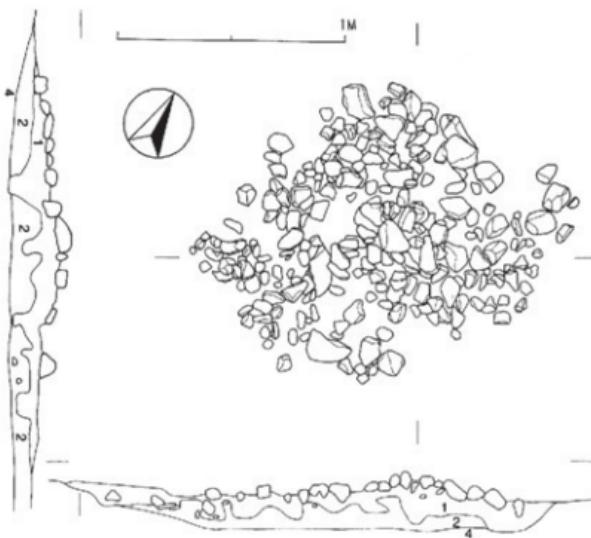


Fig 13 12号集石遺構

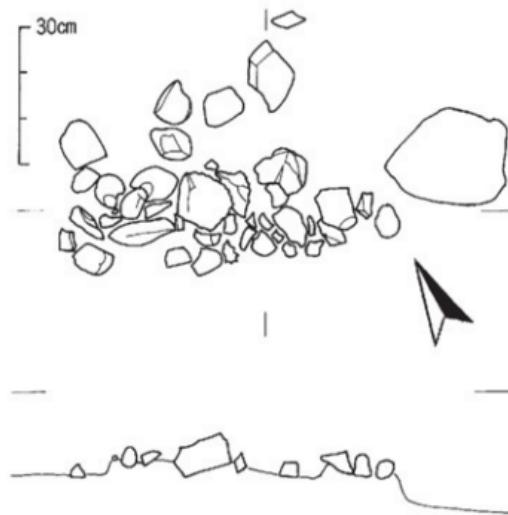


Fig 14 13号集石遺構

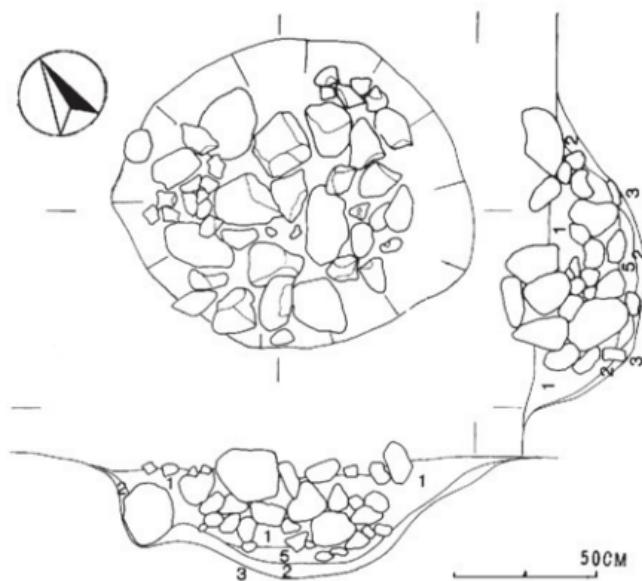


Fig 15 2号集石造構

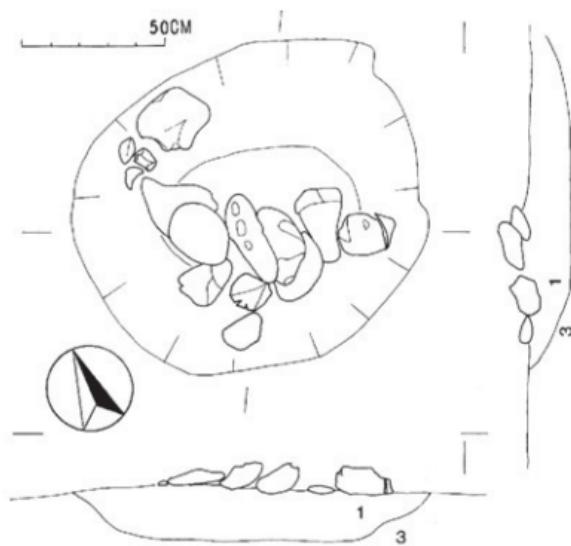


Fig 17 7号配石造構

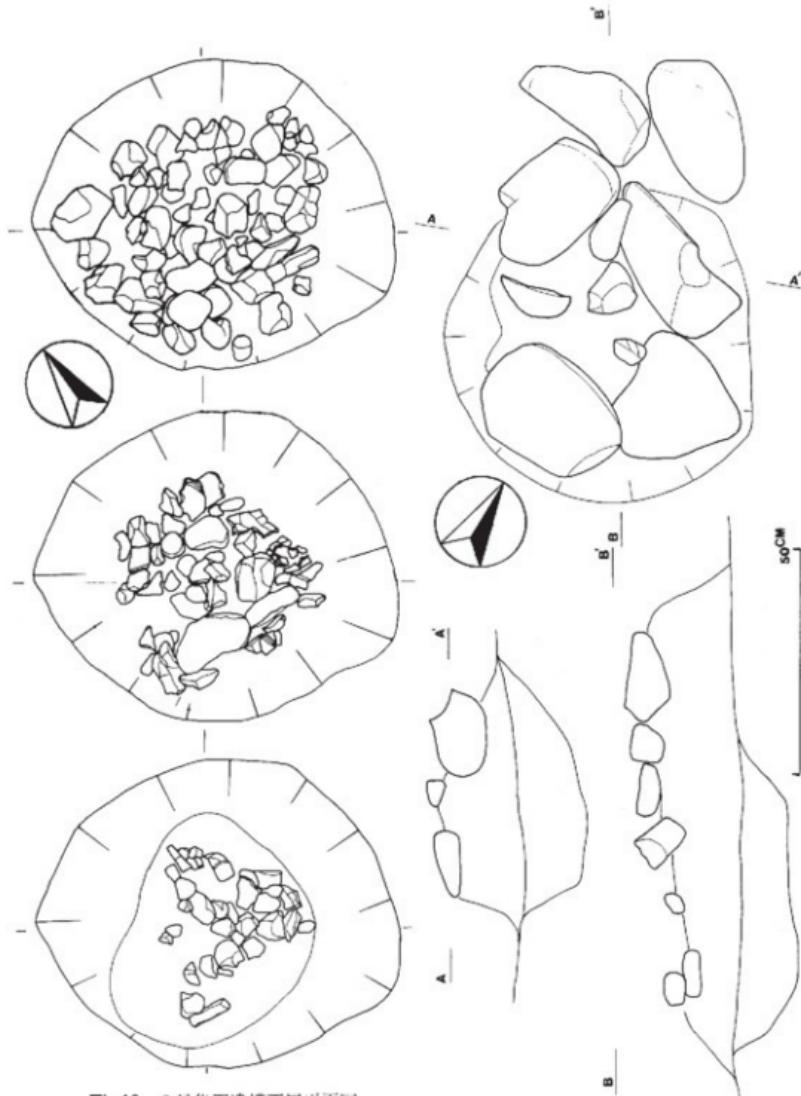


Fig 16 2号集石造構下層平面図

Fig 18 8号配石造構

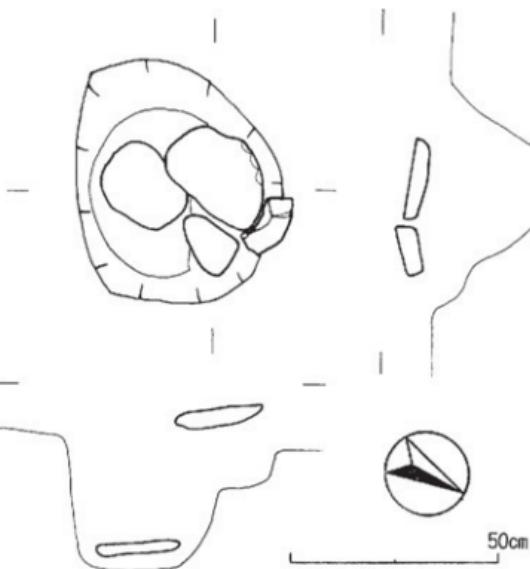


Fig 19 22号配石遺構

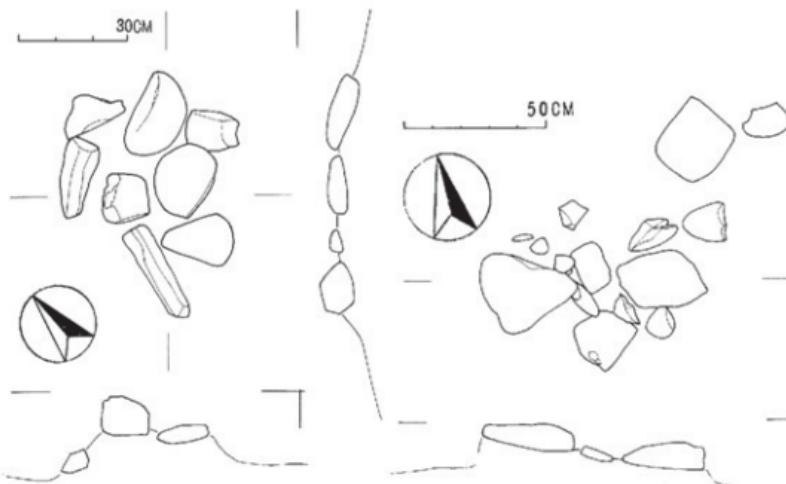


Fig 20 9号配石遺構

Fig 21 18号配石遺構

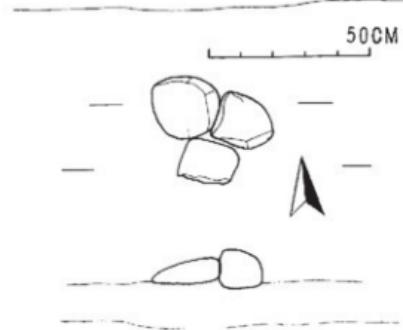
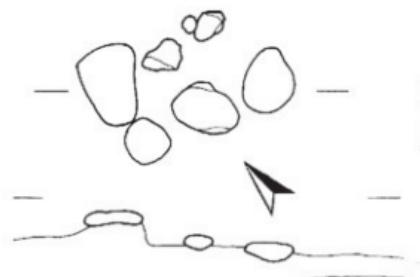
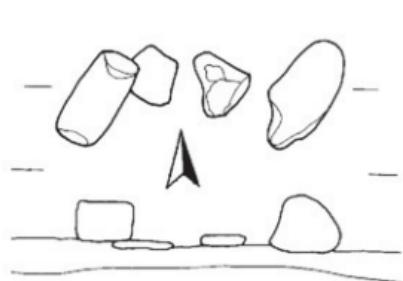
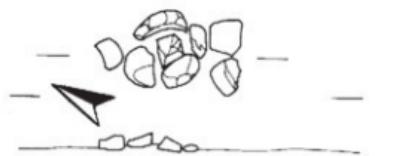


Fig 22 配石遺構（上より16、20、19、10号遺構）



Fig 23 11号配石遺構

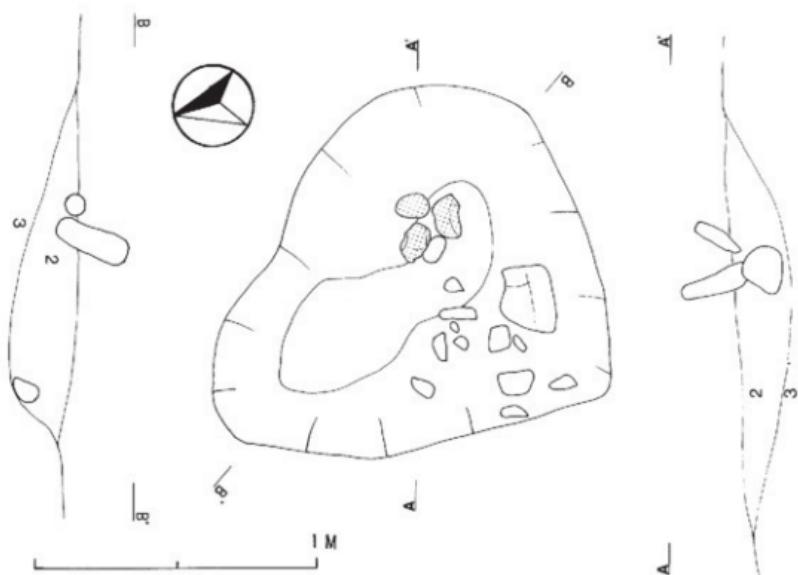


Fig 24 15号配石遺構

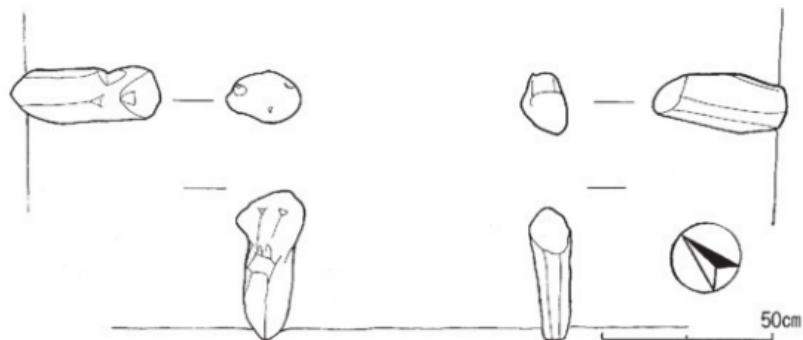


Fig 25 17号立石遺構

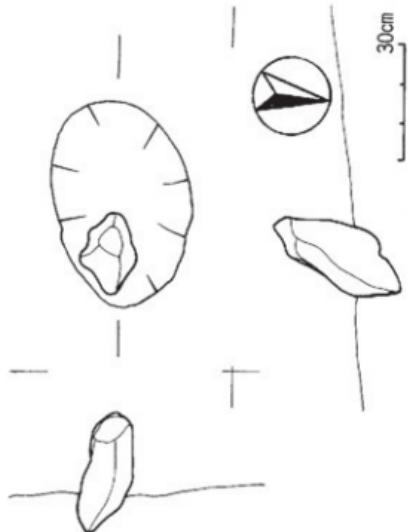


Fig 26 21号立石造構

4 集石造構D類

Fig 15、16 (PL 10-2、3 参照) に示した2号集石造構で、土塙内に礫が充満しているもので、一見集石炉を思わせるものである。土塙の口径は $120 \times 130\text{cm}$ 、深さ40cmで、その断面はほぼ半円状である。土塙内の礫は最大径30cmを計る礫を含め、長径20cmを超えるもの14個を数え、比較的大型の礫である。これらの礫はその量コンテナ14個に及ぶが、その殆んどが石英斑岩であることは偶然のこととは考えられない。これらの礫の多くは酸化鉄の嵌入によって鱗剝れ、原形のままの移動は出来ない状態にある。塙内の地質は例言に記したが、底部に⑤の炭混入黒色土が見られる他は①黒色土、②混土層である。なおFig 16は、上より当集石の第2層目、第3層目、最下層の状況を見たものである。

5 配石造構A類

配石造構の内、配石下部に土塙を伴なうもので、7号、8号、22号造構がある。

7号造構 (Fig 17, PL 6-3) は11個のやや偏平な石を配したものである。その内7個は土塙の中心部に各々重なり合って一列に並べられている。石は最長径34cmを計り20cm台のものが主である。土塙は $112 \times 125\text{cm}$ のほぼ円形で深さは18cmと浅い。

8号造構 (Fig 18, PL 8-1) は、長径30~38cmのやや偏平の礫6個

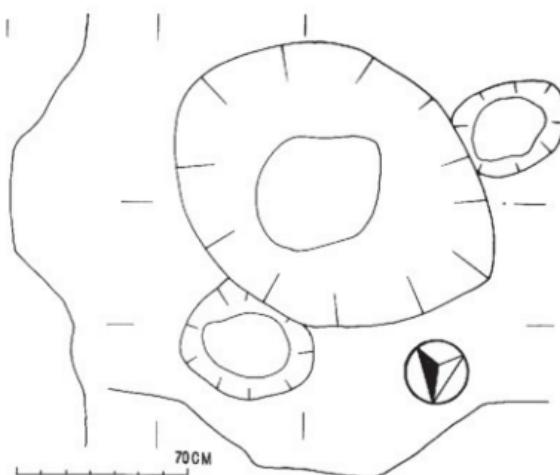


Fig 27 24号土塙

を二列に配し、さらに中心部に4個の小礫がある。土塙は図示した如く配石の一方に片寄り、口径70cm、地山に残る確認深度は20cmであるが、配石よりの計数は30cm前後となる。なお塙の南東側の一部は松の根によって少々擾乱されている。

22号造構 (Fig 19、PL 7-1) は配石、土塙共に小規模なものである。配石は大小3個の偏平な礫で、その計数は長径15~28cmである。土塙は口径50×60cm、一方にテラスがあり底部は25×40cmと半円形である。底部には長軸22cmの偏平な石が置かれている。

6 配石造構B類

配石以外に造構を持たないグループであり、9号、18号、16号、20号、19号、10号造構がある。

9号造構 (Fig 20、PL 8-2) は15~28cmを長径とする8個の礫を配す。内1個の柱状石(天然の面取石)を見る。この柱状石は石英粗面岩でその他は安山岩である。なお当配石造構の付近1m以内に長さ30cmの柱状石1個及び石皿が検出された。

18号造構 (Fig 21、PL 7-2) は大小15個の礫からなる。大礫は偏平なもののみで、全体の範囲は80cm程である。

16号、20号、19号、10号造構はFig 22に示した如くそれぞれ少數の集石であり配石とは言いがたいものであるが、一応ここに入れた。これらの内16号は破碎礫の集合である。10号(PL 7-3)はわずか3個であるが他の礫群と異なる石英斑岩であり、主に石英斑岩を内蔵した2号造構に近く所在する。

7 配石造構C類

土塙の上部に小型の立石が配されたもので11号、15号造構がある。

11号造構 (Fig 23、PL 9-2) は、土塙はほぼ南北に長軸を有する細長いものでその口径は

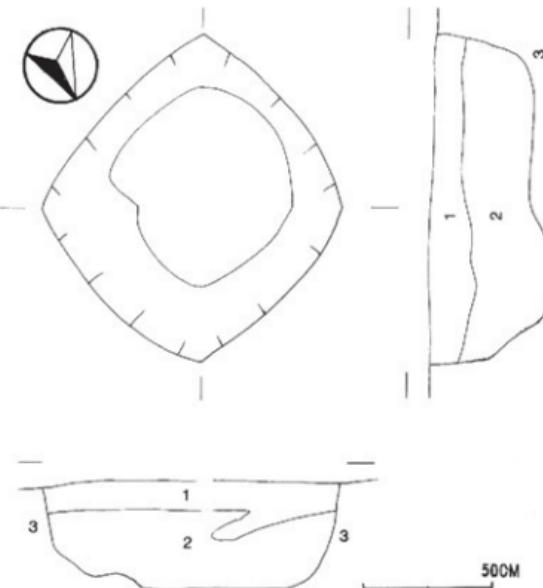


Fig 28 23号土塙

長軸220cm、短軸70cmで底部は同じく140×40cm、深さ40cm（一部50cm）である。塙の内部北側に小礫が見られ、北側に大小の礫が認められた。なお断面図に示した如く最深部に長軸35cmを計る偏平な石がある。土塙上部には数個の配石が見られる。これは小型の立石2個と偏平石とからなる。立石の1つは石英粗面岩の乳棒状石（一部面付石）で直立し、1つは安山岩で倒れかけている。偏平石はや・三角形であるが、これも縦位に配されていた。立石の前者は長軸27cm、後者は22cm偏平石の径は18cmである。なお、これらの配石は塙の南側に片寄るものであった。

15号遺構（Fig 24、PL 9-1）は、口徑の一辺が130cm程の三角形の深い土塙で塙内に12個の小礫が点在する。塙の上部に3個の配石が見られ、その1つは小型の立石で石英粗面岩の長さ28cmの乳棒状石（一部面付石）が立てられ、並んで安山岩の偏平石が縦位に配され、手前には安山岩の直径7cm程の球状の礫が置かれる。

8 立石遺構

17号、21号遺構の2遺構で、それぞれ石組を持たない一石の立石遺構と考えるものである。

17号遺構（Fig 25、PL 9-3）は、図示した如く2個の立石が80cm間隔にあり、あるいは各々の独立したものと考えられるがここでは1図にまとめた。立石左は高さ45cmを計る不定形のものに見えるが一部に天然の面付があり、5面体となる。岩質は石英粗面岩である。地山へは5cm喰い入るが混土層よりは15cm土中に入る。写真に見られる如く50cm西方に一個の礫があるが無関係と考えられる。

立石右はや・細目で高さ40cmで天然の五面体を有する石英粗面岩である。前者と同様の深さを土中に埋めている。

21号遺構（Fig 26、PL 10-1）は前者同様の石英粗面岩の天然の面付石の縦位配置である。石はや・不定形であるが天然の4面体を呈し、高さは37cmを計る。地山面に10cm程喰い入り、その掘込面と考えられる35×55cm径のピットが見られた。

9 土 塙

23号、24号遺構2基の土塙である。

24号遺構（Fig 27）はその南東側の一部が14号遺構によって削除されておるが、その口徑は長軸147cm、短軸110cmの楕円形を呈し底部は45~50cmの方形をなす。地山に残る深さは30cmと浅い。塙の左右にそれぞれ1個の小ピットが見られ、これらは径40~50cm、深さ8cm、10cmと浅く、ピットと言うよりは窟みと言うべきであろうか。塙内部及び上部よりの出土物は無い。

前後するが23号遺構（Fig 28）は、や・角張った方形の土塙でその一辺が100~105cmを計る。塙壁は垂直に近く、深さは最深部で46cmである。出土物はない。

III 遺 物

前項で報告した如く、当調査区域が、直接日々の生活に関する場とは考えにくいことで遺物の出土量は少なく、特に土器はこれといったまとまっての出土は見られず、網片が単発的に見られるに過ぎなかった。一方石器では日常の剝片石器は土器の出土と同様であったが、礫器類は一個の礫そのものとして集石群の中から出土している。なお、石窓のみが点在した。

1 土 器

中期の土器 (Fig 29, PL 12-1~14)

Fig 29の1、2は沈線文系の土器である。1は深鉢の胴部でU字状の断面を有する5条の平行沈線を有し、地文に撚糸文を施す。胎土には長石を多量に含有する。2は深鉢形土器の口縁部でU字状断面を有する3条の平行沈線文があり、地文には繩文が施されている。

3は半截竹管文系の土器で、竹管による区画内に綾杉文と刺突文とを施している。刺突文は右

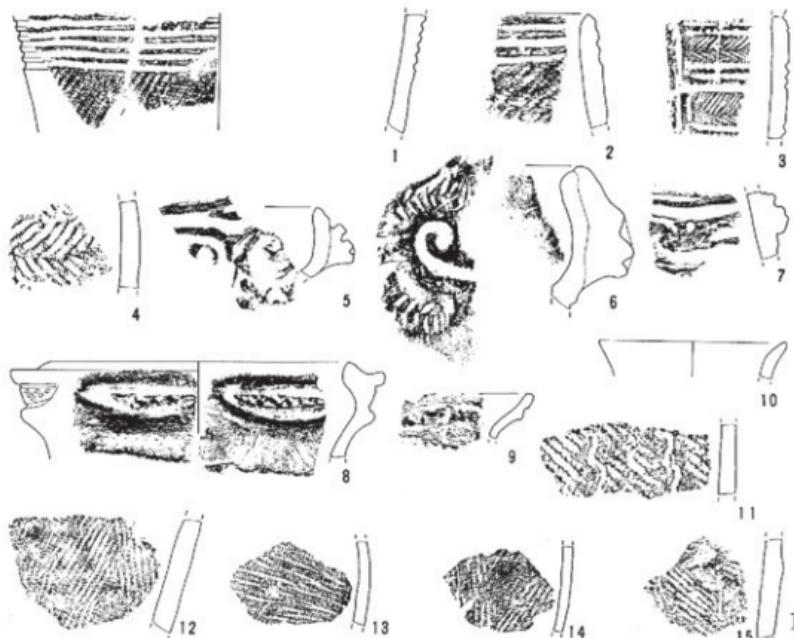


Fig 29 土器 I 中期の土器 (36)

方向から斜状に刺され、器面は明るい茶色を呈す。

4は羽状繩文を有する細片である。

5～7は粘土張付による隆起文、隆起帯を有するもので、5は山形波状口縁を有するキャリバー形土器で渦巻状の文様が見られる。胎土は砂粒を含むが緻密である。6は渦巻文と刺突文を有するもので、比較的大型のキャリバー形土器の把手であろう。砂粒を多量に含むものである。7

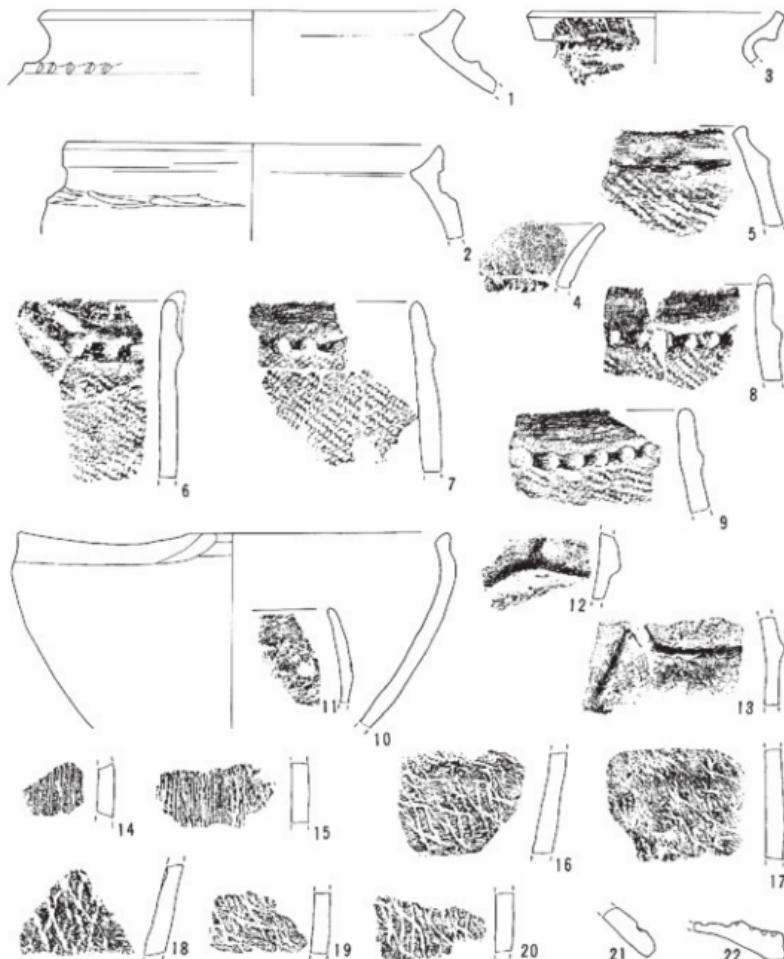


Fig 30 土器II 後期の土器 (22)

は隆帯と沈線文を有し、単独の刺突文が見られる細片である。

8は推定口径16cm、最大径20cmを計る深鉢の口縁部である。口唇部に窪帯を設けることによつて内曲させている。口縁下部の文様帶は沈線によって区画された浅い弧状文を連続させ、区内に原体は不明であるが压痕文が施されている。

9、10は薄手の小型土器である。9は口縁部の下に細い1条の沈線と交互刺突文が施されている。器外面は炭火物が付着している。10は推定口径10cm、や、外反ぎみの口縁を有し、無文である。11はS字状の連続文様の結節繩文を地文とした土器片である。

12~15はいずれも燃糸文の細片である。この内13は燃糸による压痕文の手法によるものであろうか。

後期の土器 (Fig 30、PL 12~15~30)

Fig 30の1~6はいわゆる縁帶文系の一群に部類する。これらの内1、2、5、6は隆帯を以つて頸部と胴部を区分している。1は推定口径21.5cmでくの字に外反する口縁を持つ。隆帯にはV字状の刻目文が並ぶ。2は口径20cm、隆帯が剝離している。頸部から隆帯にかけて刻文が見られる。胴部に繩文を施す。5は山形の口縁で、頸部が良くミガキ上げられている。6は隆帯の一端が口縁部の突起に向けて延びる。この隆帯には刻目文が廻る。7~9が同一個体である。

3は推定口径13cmでN型の口縁を有し、口唇部から外部へ細いカキメ文が施され、頸部の頸部分に刻目文がある。4は薄肉の器で頸部に1条の沈線と刻目を有する。

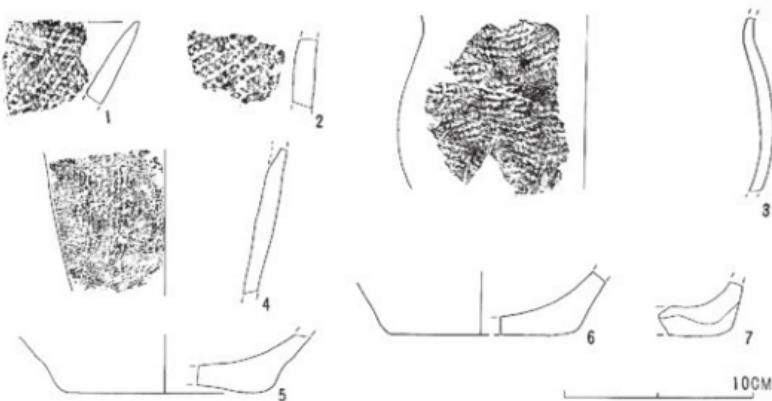


Fig 31 土器III (Fig)

10、12、13も隆帯を有するもので10は推定口径23cmの浅鉢土器である。波状の口縁を有し、突起部に隆帯を見、地は無文である。12、13は同一個体と思われ、隆帯による区画内に繩文を残し、他は擦り消されている。

11は薄肉の無文土器で補修孔を穿つ。

14、15は条線文系の土器、16~20は網目文を施した一群である。

21、22は、周辺での表面採集資料であるが共に沈線と刺突文を施された蓋型土器である。

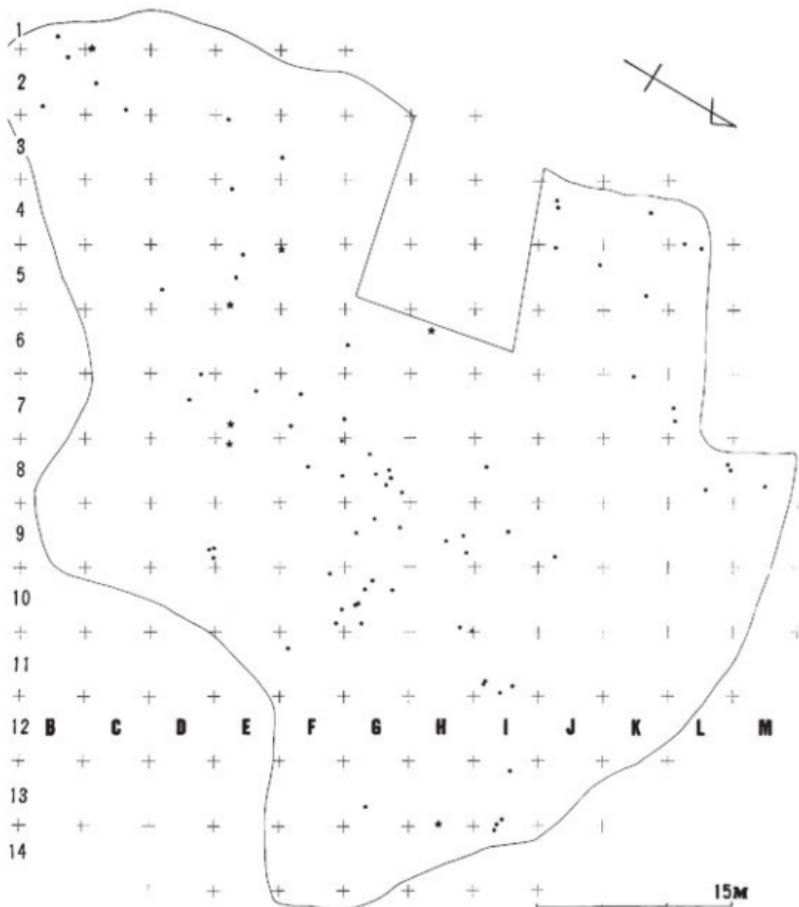


Fig. 32 石器出土位置図 (★印は石器)

その他の土器

時期不明の土器をFig 31に示した。

1、2は同一個体と思われるもので、器全面に圧痕文が施されている。施文の原体は不明だが、細かい網代状が考えられる。器は内外とも薄茶色で胎土は緻密である。3は胴張りの器で、全面に縄文、内部は工具による圧痕、カキメが顕著である。薄肉で高温度の焼成である。4は底部に近い片で縦位のカキメ文がかすかに施されている。砂粒を多量に含むものでもろい。6～8は底部片である。6は外面全体が良く研磨されている。



Fig 33 石器 I 石鎌、石斧 (3)

2 石 器

石 鎌 (Fig 33-1～3, PL 13-1)

3点の出土を見た。1は凹基無茎形で長さ1.7cm、最大幅1.5cm、厚さ0.25cmで材質は石英である。2は円基形で長さ4.4cm、幅2.0cm、厚さ0.8cmで硬質頁岩製で3号遺構（土塚）の出土である。3は同じく円基形で長さ4.8cm、幅3.4cm、厚さ1.0cmで材質は硬質頁岩である。

石 斧 (Fig 33-4～10, PL 13-2～3)

いわゆる鎌状石器である。形態は上方が狭く下方が広がりほど左右対称である。刃部は5は円刃、10は偏刃であり、他は直刃である。製作に当ってはいざれも両面から加撃調整している。計量的には5の7.1cmから8の10.3cmである。材質は4の輝石玄武岩の他は総て硬質頁岩である。

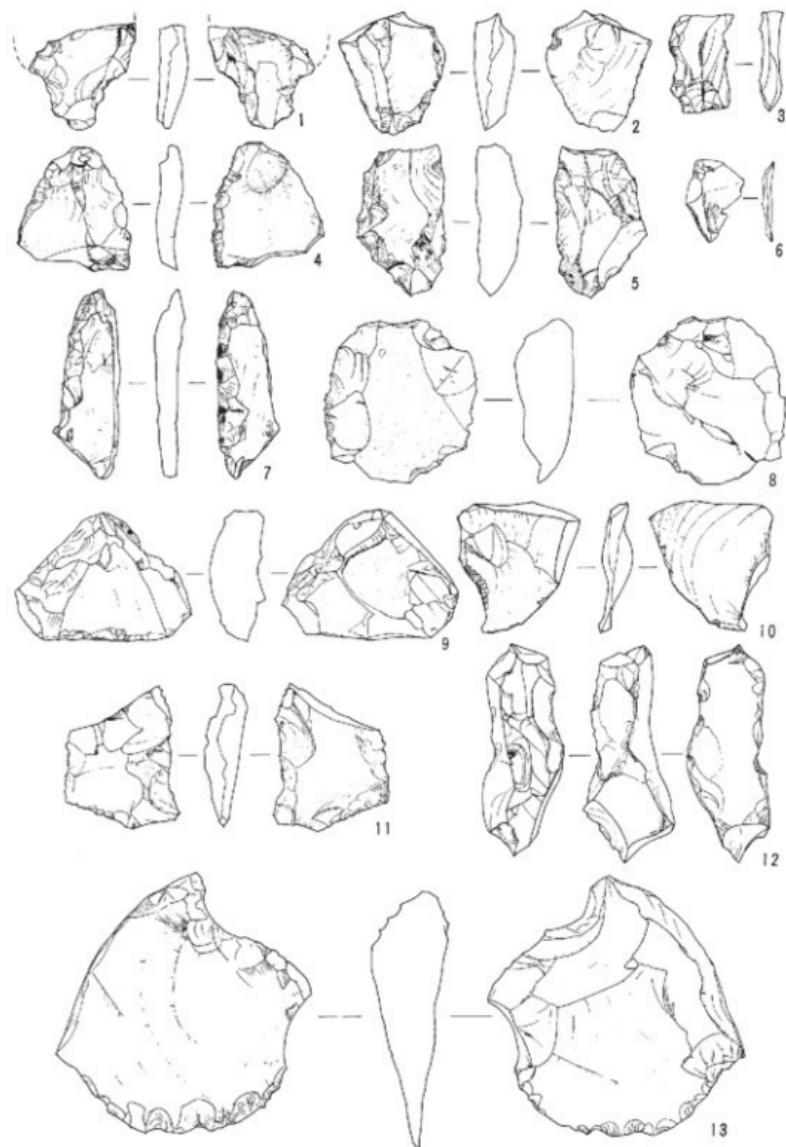


Fig 34 石器Ⅱ 搤器(刃)

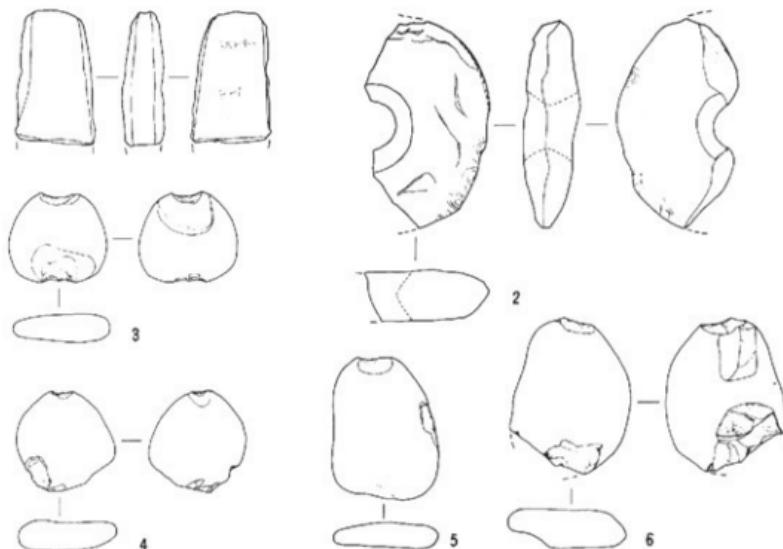


Fig 35 石器III 石斧、石錘 (Fig.)

石 槍 (Fig 34-1、PL14-1)

茎部の残欠で形態的には不明であるが、一応石槍とした。材質は硬質頁岩で両面の加撃調整が見られる。最大幅6cmを計ることから大型石器となろう。

搔 器 (Fig 34-2～13、PL14-2～12)

いずれも不定形のもので、大型のものが目立つ。3、6は小型であり、共に片面調整であり、材質は玄武岩である。その他は総て硬質頁岩を材質としており、10を除いては両面調整を行っている。なお12は搔器に部類しないかも知れない。計量は6の4.3cmから13の最大径14cmまである。

石 斧 (Fig 35-1～2、PL14-13～14)

1は刃部を失っている残欠品である。残存する最大幅4.2cmで石英粗面岩を材質としている。表面はザラつくが磨製石斧である。

2は3分の1強の残欠であるが環状石斧である。推定直徑12cm、厚さ2.9cm、中心部の貫通孔は直徑2.5cm、その周辺部は4.5cmを計る。刃部は両凸の蛤刃である。材質は砂岩であり、軟質である。

石 錘 (Fig 33-3～6、PL16-3)

いずれも偏平な小石の上下を打欠いただけの単純なものである。材質は石英粗面岩2点、流紋岩、石英斑岩である。なお4、6は一部に欠損部分があること等から石錘と断定は出来ないが、一応ここに図示した。

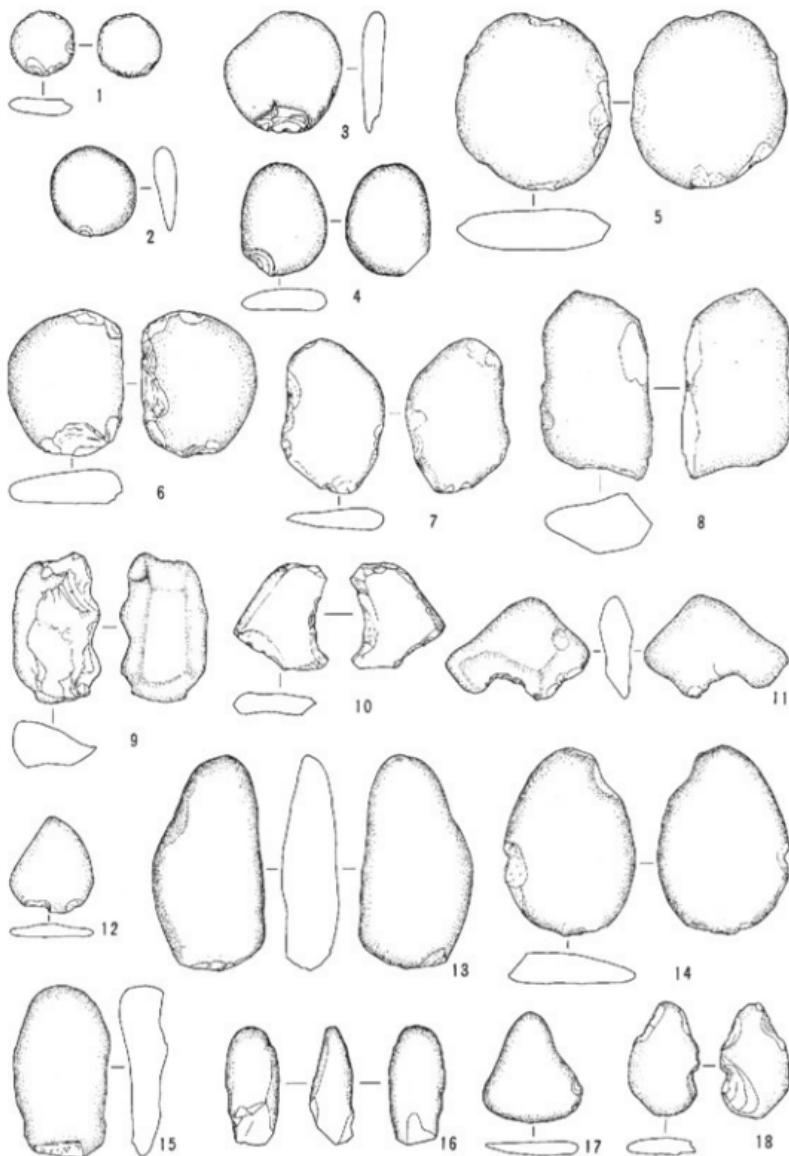


Fig 36 石器IV 碓器 (%)

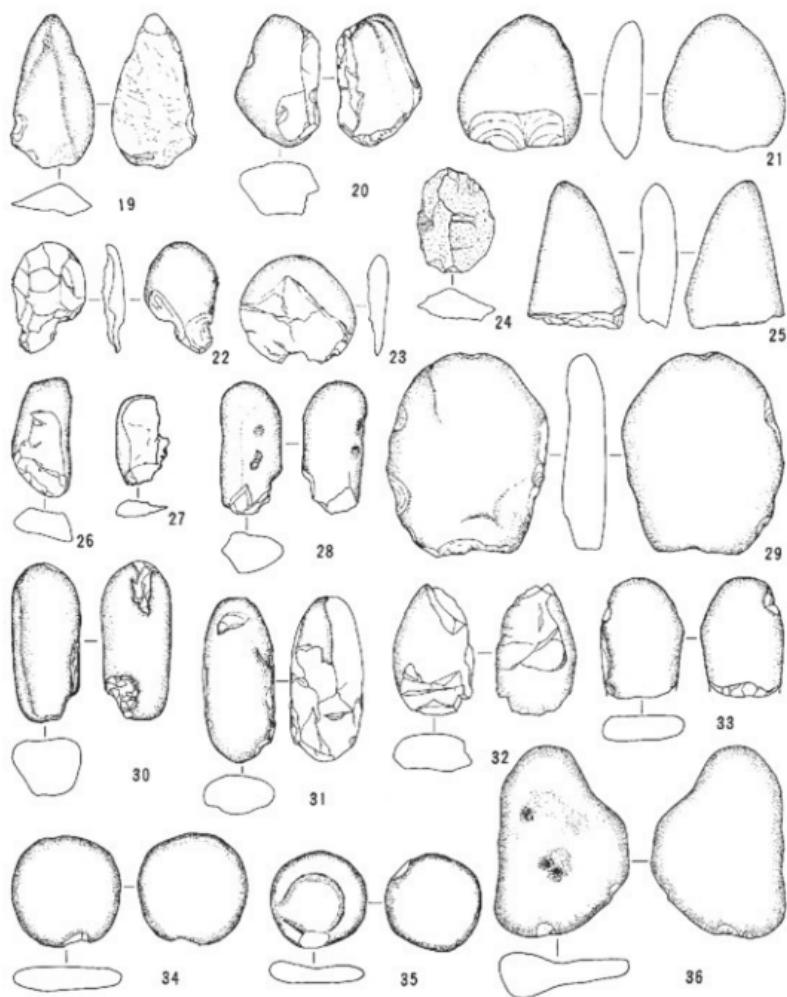


Fig 37 石器V 磨器 (36)

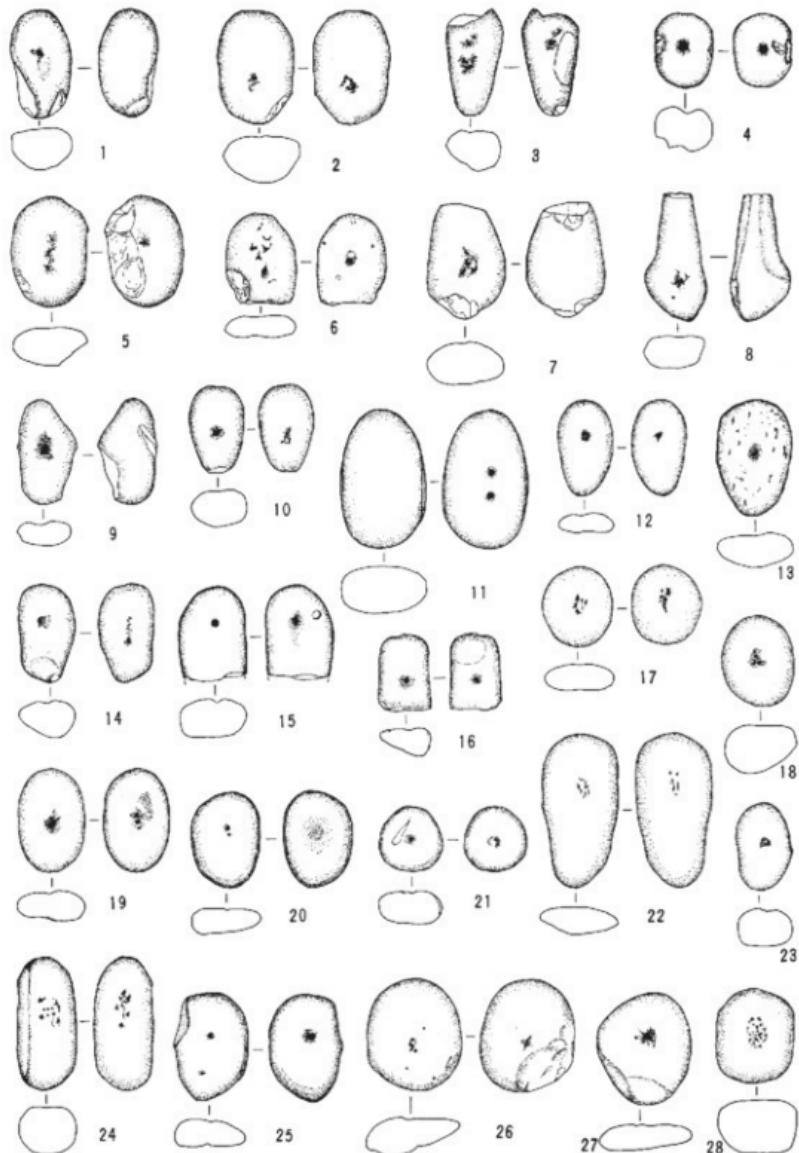


Fig 38 石器Ⅵ くぼみ石 (1)

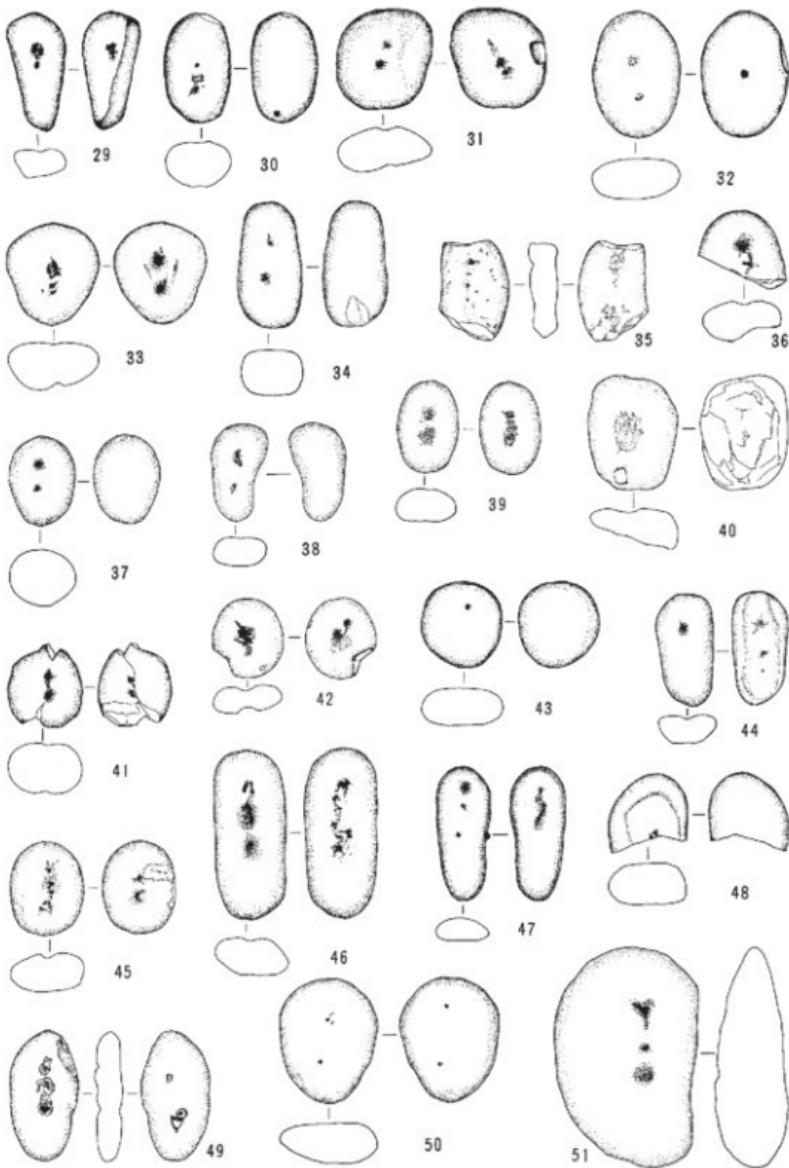


Fig 39 石器Ⅶ くぼみ石 (%)

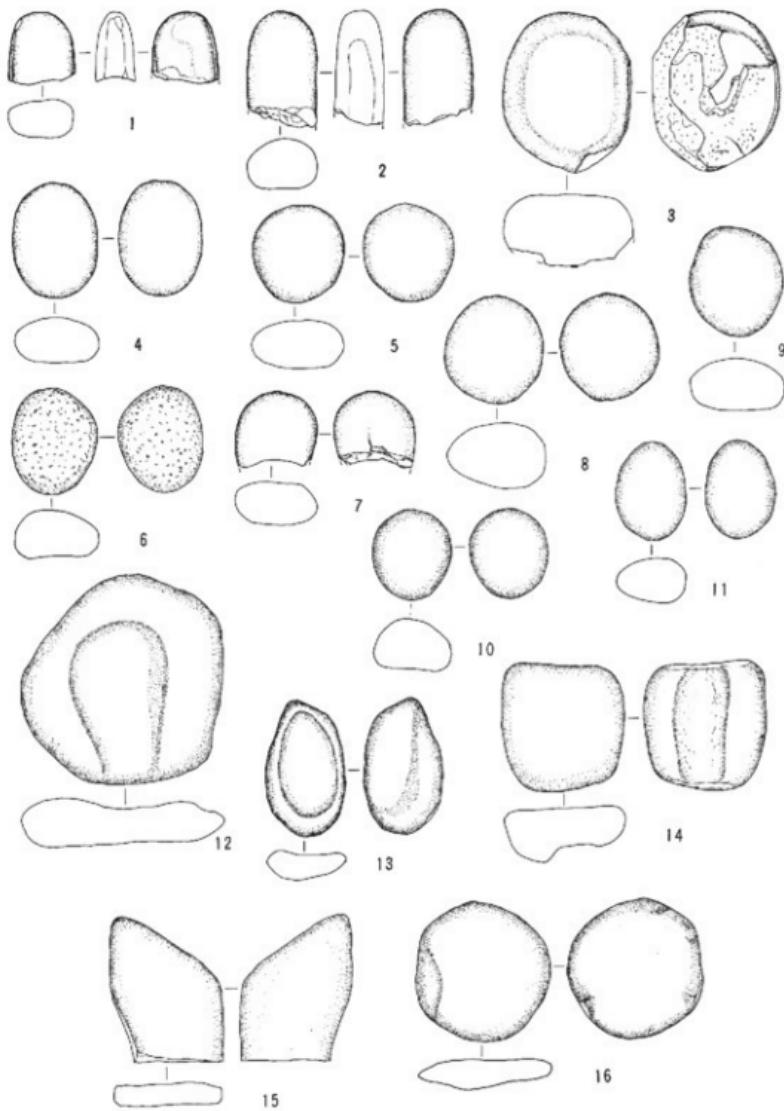


Fig 40 石器類 スリ石、石皿 (16)

礫 器 (Fig 36、37、PL 15)

主に大型のものが多い。最小は1の6.9cm、最大は13の22.8cmである。用途的には搔器的なものと打削器的なものがある。前者としては1の円形スクレバー的なものをはじめ、2、5、7、10、18、22、23、24、27がある。後者のチョッパー的なもの内15、19、21、31、32はむしろ打製石斧の形態を有すると見るべきであろうか。これらの材質は安山岩21、石英粗面岩10の他硬質頁岩、チャート、閃綠岩、流紋岩、輝綠岩の各1点がある。

なお、後述するクボミ石 (Fig 38) の1～9の9点はその痕跡から見てチョッパーとして再使用されたものであろう。

くぼみ石 (Fig 38、39、PL 16-1)

図示した如く多量の出土を見た。内には形態的に不定形のもの、又不安定の物等も見られる。クボミは石の両面に見られるものが多く、又複数のものが多い。又22、23、24、27、28等の如くスリ石（磨石）として使用を兼たもの、前述した如くチョッパーとしたもの、10、14、26、30等は敲石的にも使用されている。材質は安山岩28、石英粗面岩16、凝灰岩2の他、凝灰角砾岩、層灰岩、流紋岩、輝石安山岩、集塊岩が各1点ずつある。

石 盆 磨 石 (Fig 40、PL 16-2、17-1)

石皿として12～14がある。この他15、16の平坦な磨耗面から一応同類とした。いずれも天然の平面や凹面を利用して積極的な要素は薄い。安山岩2の他砂岩、輝綠岩、石英粗面岩がある。

磨石は1～11で、1、2、3はその磨耗面が顕著である。材質は安山岩7、石英粗面岩3、集塊岩1である。

その他

石器ではないが、天然の石棒がある。これら的一部は立石として利用されたもので、多くは天然の面付石である。その面は4～6面体を主とするが、中には三面体、楕円形もある。これらの計量については表示した通りであるが、その材質は、大型のものは集塊岩1の他は総て石英粗面岩であり、小型のものは凝灰岩、石英粗面岩、輝綠岩がある。

フレークの材質は、その多くが硬質頁岩であり、その他、玄武岩、珪質頁岩、珪岩、チャート、流紋岩がある。

IV ま と め

当遺跡の発掘調査の結果、住居跡その他の日常生活に直接関連する遺構を見ることが出来なかった。このことは当発掘区域が台地の東隅の末端に位置し、かつ風光明媚の地に当たり日常生活とはかけはなれた目的の地であったのであろう。現在遺物の表面採集はほとんど出来ないが、おそらく当遺構群に関連した集落跡は西方の台地内に存在するものと推定されるものである。又出した土器がまったく散発的に出土する細片のみであること、この区域で土器の使用がほとんど行われなかつたことを裏付けることになろう。

遺構は種々の形態を有するが、いわゆる配石遺構、集石遺構、立石遺構等であり、さらに多量の河原石の散布するものであった。これらの性格についてそれぞれ判断出来ないが、何等かの祭祀遺構であり又祭祀の行われた地域と考えられよう。縄文時代の精神文化に見られる祭祀、即ち宗教儀礼の内には当然のことながら埋葬、再葬墓等の葬送儀礼に関するものや祖靈崇拜の祭祀等がある。土塚を伴なうものに石棺墓、配石墓と呼称するものがあり、小土塚を伴なうものに再葬墓がある。そして土塚から分離した集石、配石等も同様葬送儀礼に伴なう祭祀のあらわれと理解されている。又、立石遺構等も墓標もしくは祖靈崇拜の祭祀における何等かの目じるしとされてい

面付石(石棒)計測表

(単位cm)

長さ	長径	短径	形態	長さ	長径	短径	形態
26	8	4.5	五面体	24	8.5	7	五面体
31	8	8	五〃	28	7.5	6	六〃
22	9	9	六〃	20	6.5	5	五〃
21	8.5	5.5	四〃	22.5	6	5	四〃
28	7	5	四〃	22	6.5	5.5	五〃
27	9	6.5	五〃	23	7.5	6	六〃
26	7	5.5	四〃	29	8	6.5	五〃
(18)	7	6.5	五〃	21	10	6	五〃
27	6.5	6	四〃	26	7.5	4.5	四〃
33	9	7	四〃	30	10.5	6	四〃
36	11	9.5	四〃	34	11	9.5	五〃
14	6.5	5	六〃	(11)	6.5	4.5	五〃
(14)	6.5	4	五〃	11	5	4.5	三〃
13.5	5.5	4	三〃	20	6.5	4	橢円形
19	5.5	3	四〃	16.5	5.5	4	四面体
15	4.5	3.5	四〃	19	5	4.5	四〃
(9.5)	4.5	3	四〃	12	5	3.5	五〃
17	4	2.5	四〃	16	3.5	3	四〃
16	4.5	3.5	六〃				

る。これらのこととふまえて当遺構を考える時、集石遺構A類とした1号遺構は、配石遺構A類の7号遺構と同様の土塙墓であろう。又8号、22号の小土塙は再葬墓的要素と見られよう。配石遺構C類の11号、15号遺構は立石遺構である。共に乳棒状立石と球状、又は円平石の組合せは、屋内祭祀の前駆的な形態と言われている茨城県向山貝塚遺跡に類似するものである。17号、21号の立石遺構と共に石棒祭祀と考えて良かろう。又散付した多数の面付石（石棒）も立石として配置されていたことは容易に窺われ、配石遺構B類の9号遺構も立石を中心とした配石遺構と考えられるところである。

出土遺物の内7点の石籠は特筆に値する。石籠の分布は東北地方北部から北海道南部にかけて主に分布し、東北地方南部以西では検出例はまれである。その用途についてはかつて打製石斧の一種と考えられたが明らかではない。昨今では搔器的役割を有するものと考えられている。7点もの石籠の出土はこの場所内に狩獵祭祀が行われたことも合せて考えねばならないのだろうか。今後の課題としたい。

凹石を始めとする磨石、礫器等の礫石器の多量の出土はこれらが石器としてではなく礫の一個を見るもので集石遺構や散布する礫群に混入して出土していることから窺うことが出来る。なお、当地方ではその出土が比較的稀である環状石斧は遺跡に近い“川の下遺跡”（南蒲原郡田上町）にその類例を見る。

当遺跡の時期を考える時、前述した如く、何等かの特徴を有する土器が非常に少ないとからこれを以って総てとは言えないが、竹管文を有すいわゆる北陸系の土器、新崎、上山田式に部類するもの（29—3）、馬高式（29—5）東北系で大木8b式（29—6）に部類するもの等の縄文中期前半のもの、さらにFig 30に示した三十稻場式、南三十稻場式に属するものは縄文後期初頭に当る。当遺跡の営みもこの範疇にあろう。

加茂市内における同時期の遺跡としては“岩野原A、B、C”“加茂市役所”“水源地”“下土倉”等の遺跡がある。これらの内、岩野原C遺跡に乳棒状石、面付石の多量出土が見られ、水源地遺跡の面取石等も同じく石棒と考えられるものである。

縄文時代における祭祀遺構は総ての遺跡に関連するものであるしその兆候はどこにでも見られるのであるが、内でも顕著な祭祀遺構を有する県内の遺跡には全国的な規模である“龍峯遺跡”的石棺墓群があり、“寺地遺跡”的配石遺構、や、時期が降るが“村尻遺跡”“鳥屋遺跡”的土塙墓群等がある。

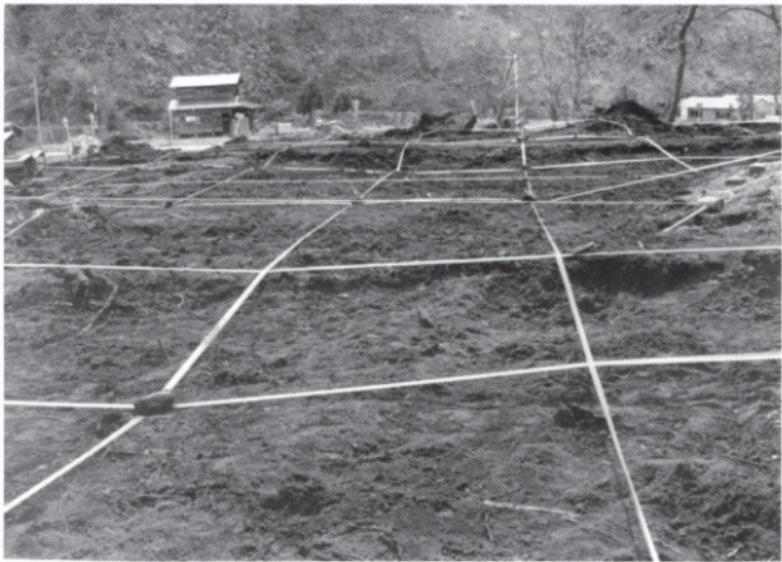
本稿における遺跡、遺構に関する論考は必ずしも眞実とはかぎらない。データーの分析、情報の収集に限界を有する。よって大方の御叱正を頂ければ幸いである。又、種々御世話になった多くの方々に謝意を申し上げる次第である。

参考文献

- 田川幸生 「伊勢宮」長野県山ノ内町教育委員会 1981
- 土肥 孝 「縄文時代Ⅱ」『日本の美術3』至文堂 1982
- 金子裕子 「縄文時代Ⅲ」『日本の美術4』至文堂 1982
- 加藤晋平他 「縄文文化の研究」雄山閣 1983
- 中島栄一 「下山遺跡」南蒲原郡下田村教育委員会 1977
- 小林達夫 「壬遺跡1981」「壬遺跡1982」中魚沼郡中里村 国学院大学文学部考古学研究室
- 室岡 博 「龍岸遺跡」（第一次発掘概報）中頸城郡中郷村教育委員会 1984
- 寺村光晴 「寺地硬玉遺跡」（第四次発掘調査概要）西頸城郡青海町教育委員会 1973
- 関 雅之他 「村尻遺跡Ⅰ」 新発田市教育委員会 1982
- 関 雅之他 「鳥屋遺跡Ⅰ」 豊栄市教育委員会 1980
- 加茂市史編纂委員会 「加茂市史 上」加茂市 1975



1



2

1 遺跡近景 2 グリッド設定



1.2 発掘作業スナップ



1



2

1 西側セクション 2 南側セクション



1 東方全掘 2 中央配石



1



2

1 6号、7号、13号、14号集石遺構 2 3号、4号、5号集石遺構



1



2



3

1.2 1号集石遺構 3 7号集石遺構



1 22号配石造構 2 18号配石造構 3 10号配石造構



1



2

1 8号配石造構 2 9号配石造構



1



2



3

1.2 配石造構(15号、11号) 3 17号立石造構



1



2



3

1 21号立石遺構 2 2号集石炉 3 同 2層目石組

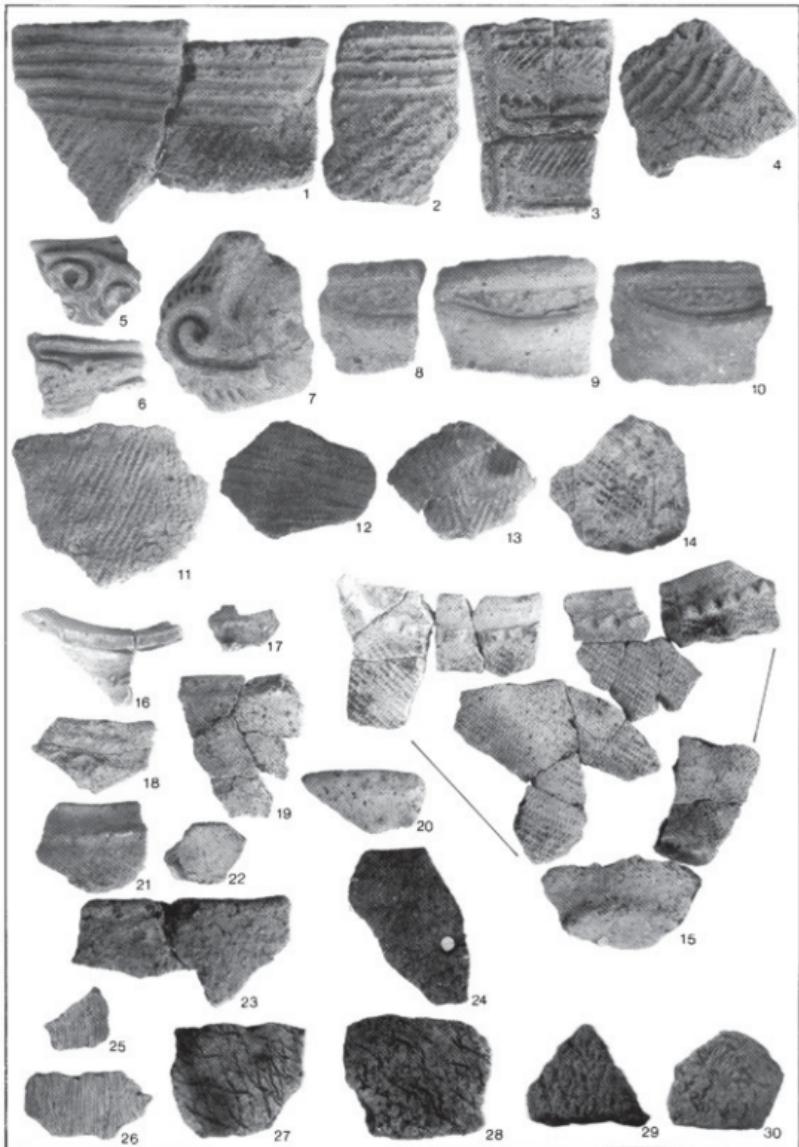


1

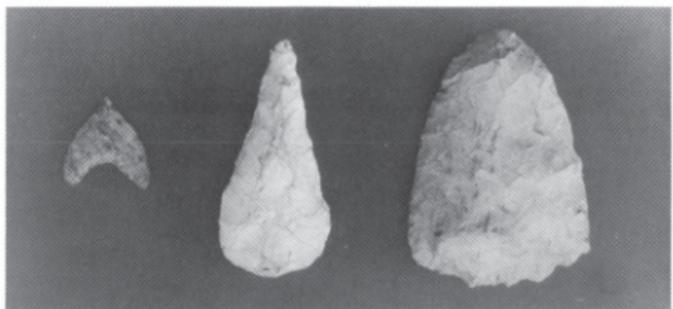


2

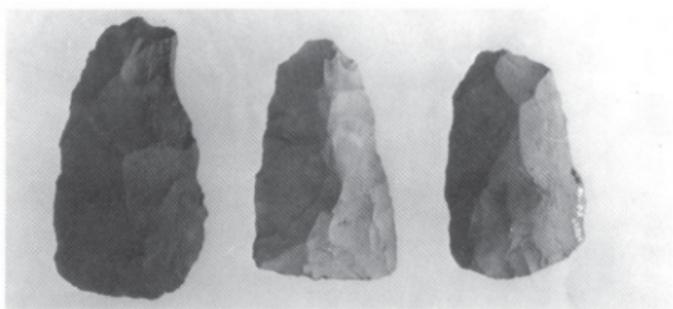
遗物出土状况 1 E-8区 2 E-7区



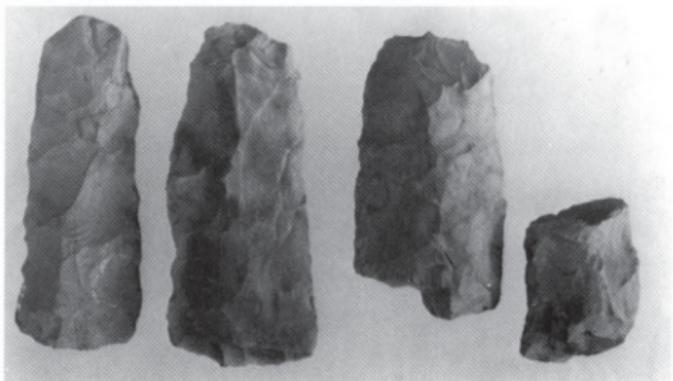
縄文中期・後期の土器



1

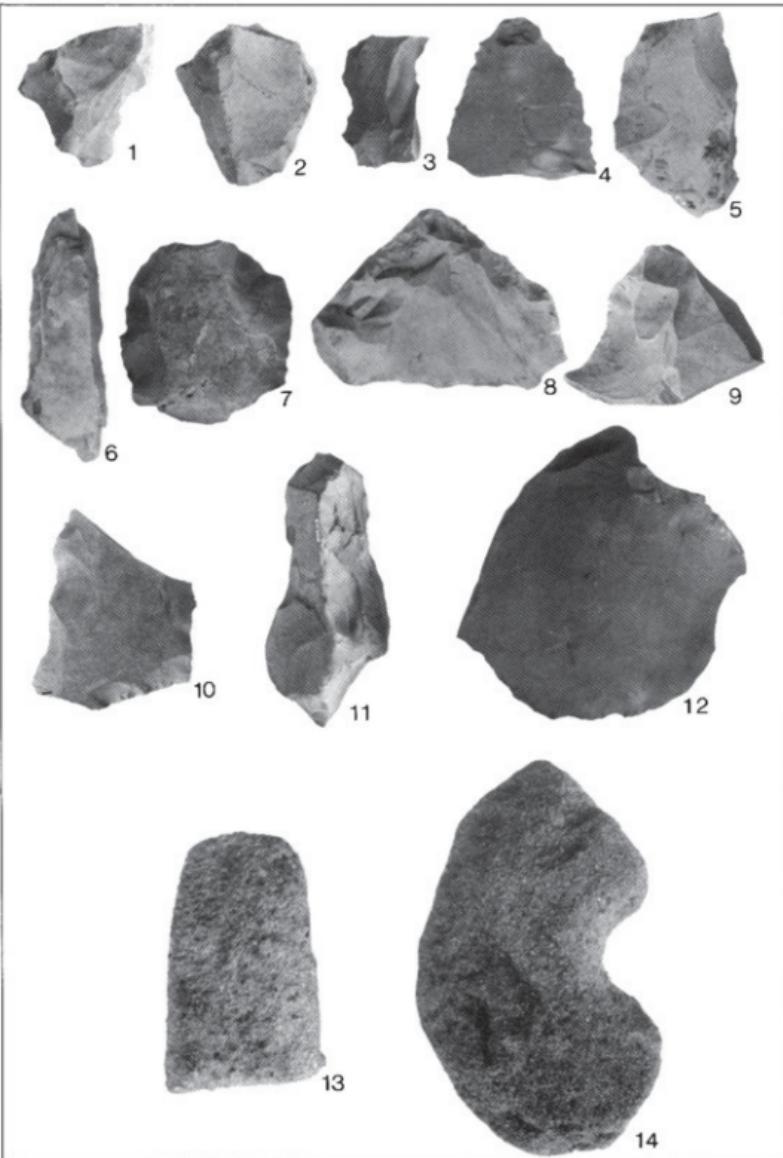


2



3

1 石 錐 2.3 石 簾



1 石 槍

2~12 搔 器

13 磨製石斧

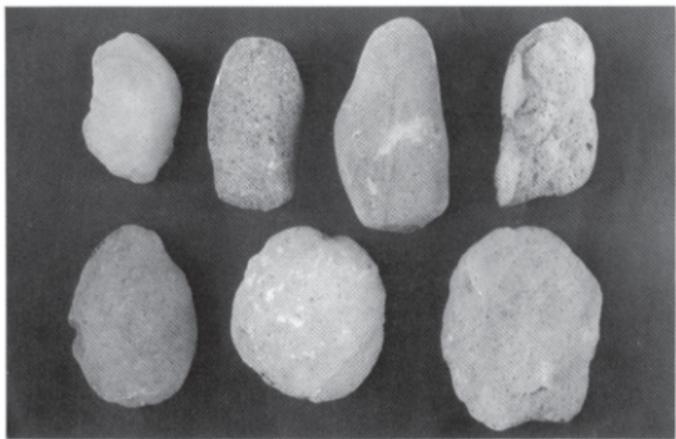
14 環狀石器



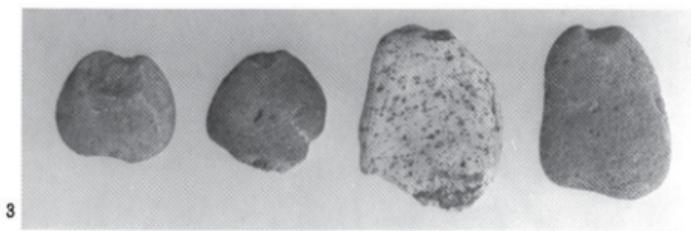
1



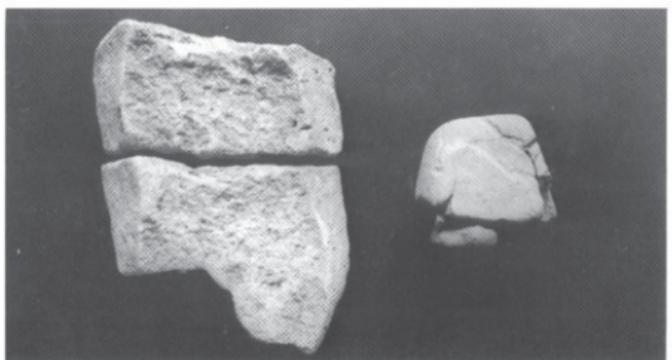
2



3



1 くぼみ石 2 スリ石 3 石 錘



1



2

1 石 盆 2 面取石



調査参加者

小野昇衛、小野勝蔵、外山登、管家操、岡橋栄吉、鶴巻健吉、吉田唯左衛門、西潟大四郎、
阿達龍平、波塚健太郎、波塚佐忠治、外山茂、藤田久、難波ユキノ、坪谷ヨリノ、岩瀬良介、
坂上総三、五十嵐周一郎、五十嵐正二郎、石井勝二郎、今井八十吉、大久保吉二、茂野平策、
明田川健太郎、難波善四郎、諸橋由平、高橋ミイ

発行日 昭和 61 年 3 月 25 日

加茂市文化財調査報告(2)

七谷忠魂碑遺跡
緊急発掘調査報告書

発行者 加茂市教育委員会

新潟県加茂市松坂町1-3

TEL 0256-52-0080

印刷所 株式会社サンプリント

新潟県加茂市柳町1-4-3

TEL 0256-53-0261
